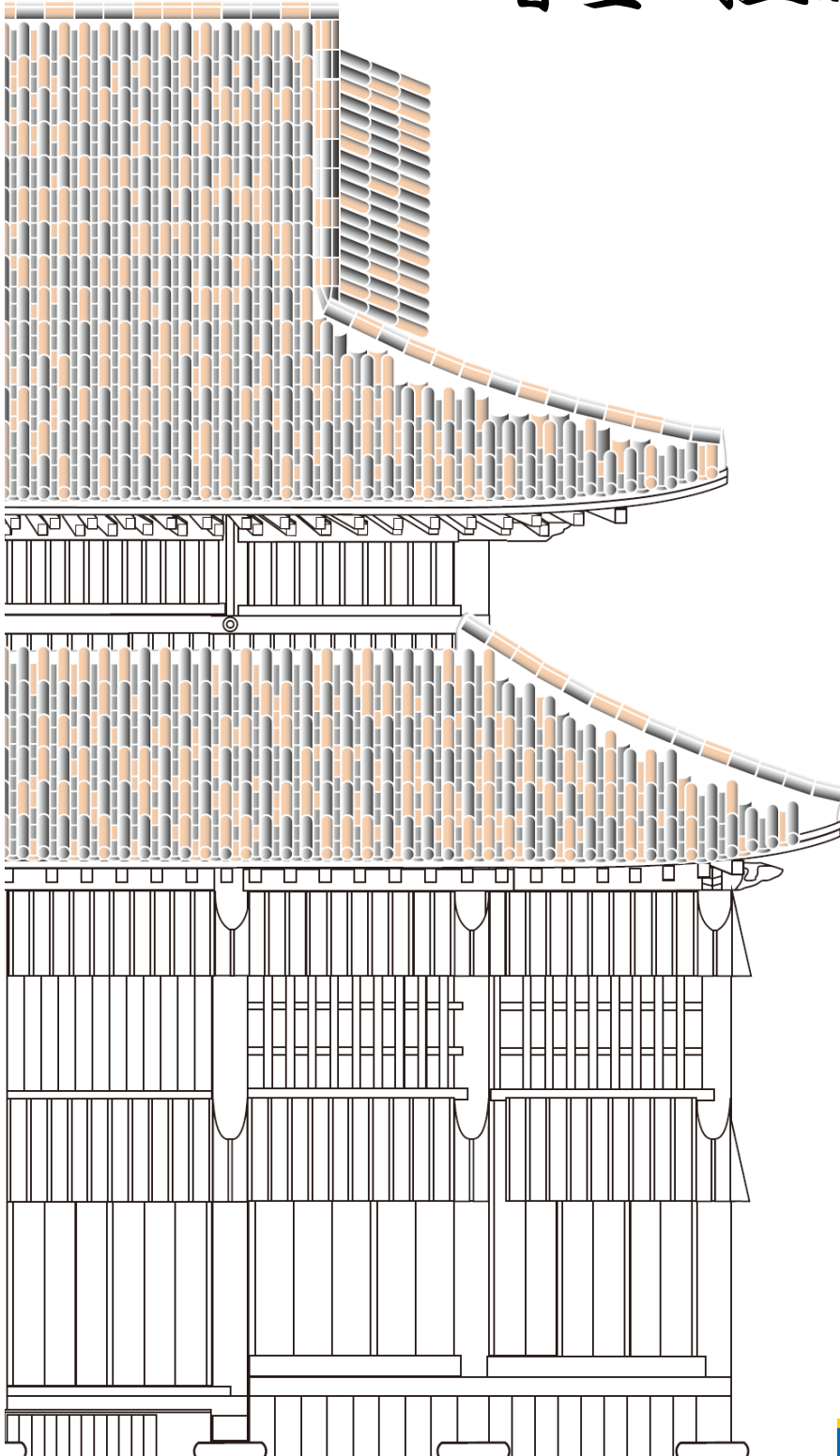


展示図録

むんだすいぬや一ぬ 首里城正殿の屋根



石
龍
太

城西大学
美術学部
学芸学系
准教授

目次

ごあいさつ

【第1期】 13世紀後半～1392年？～	・・・1
コラム1 首里城正殿の原点とは	・・・2
【第2期】 ？～1453年？1459年？	・・・4
【第3期】 ？～1456年～16世紀初頭	・・・5
【第4期】 16世紀初頭～1660年	・・・8
【第5期】 1670～1709年	・・・10
コラム2 琉球近世瓦の生産と消費(15～17世紀)	・・・13
【第6期】 1712～？	・・・15
コラム3 琉球近世瓦の生産と消費(18～19世紀)	・・・19
【第7期】 ？～1768年？～1879年	・・・21
【第8期】 1879年～1924年	・・・24
コラム4 古写真と考古資料の比較からみた第8期正殿の屋根景観	・・・26
コラム5 絵図史料、着色写真からみた第8期正殿の屋根景観	・・・28
【第9期】 1934～1945年	・・・30
【第10期】 1992～2019年	・・・33
コラム6 城からみた沖縄の近現代史	・・・34
首里城正殿の屋根景観年表	・・・38
引用・参考文献	・・・39
図の出典	・・・41

ごあいさつ

すいぐすく

首里城は、考古学、文献史学等の成果によれば、少なくとも13世紀中には首里の地に何らかの形で登場し、15世紀までには政治的な機能を果たすようになったと考えられる。そして沖縄島の勢力が統一された15世紀以降は「琉球王国の王城」としての役割を450年に渡り担い続けることとなった。19世紀後半の王国の消滅と共に王城としての役割を終えるが、その後も特別な空間という意識は続き、軍隊が、学校が留まる歴史が繰り返された。そして戦前と戦後の2度の復元後は、観光地としても大きな役割を果たしていた。1992年の復元時には「戦後復興の象徴」という意味付けも加えられることとなる。

こうした長い歴史と多面的な性格を持つ首里城は、時代によってその姿を変えてきたこともまた知られている。2019年10月の火災以降、首里城とは何だったのか、その実像について、再び広く興味関心が集まり始めた。

むんだすいぬやーぬ

本展示は、これまでになされた様々な研究蓄積を総合し、特に首里城正殿の屋根に焦点を当てて、その実像を時系列に沿って追究する。また壁の色調や龍柱をはじめ、議論的となってきた事柄を含めた建物全体の姿についても、史資料を踏まえて検証し思い切った復元を試みる。本展示は、首里城を巡るイメージを少なからず動揺させることになるかも知れない。今後の議論の一助となれば幸いである。

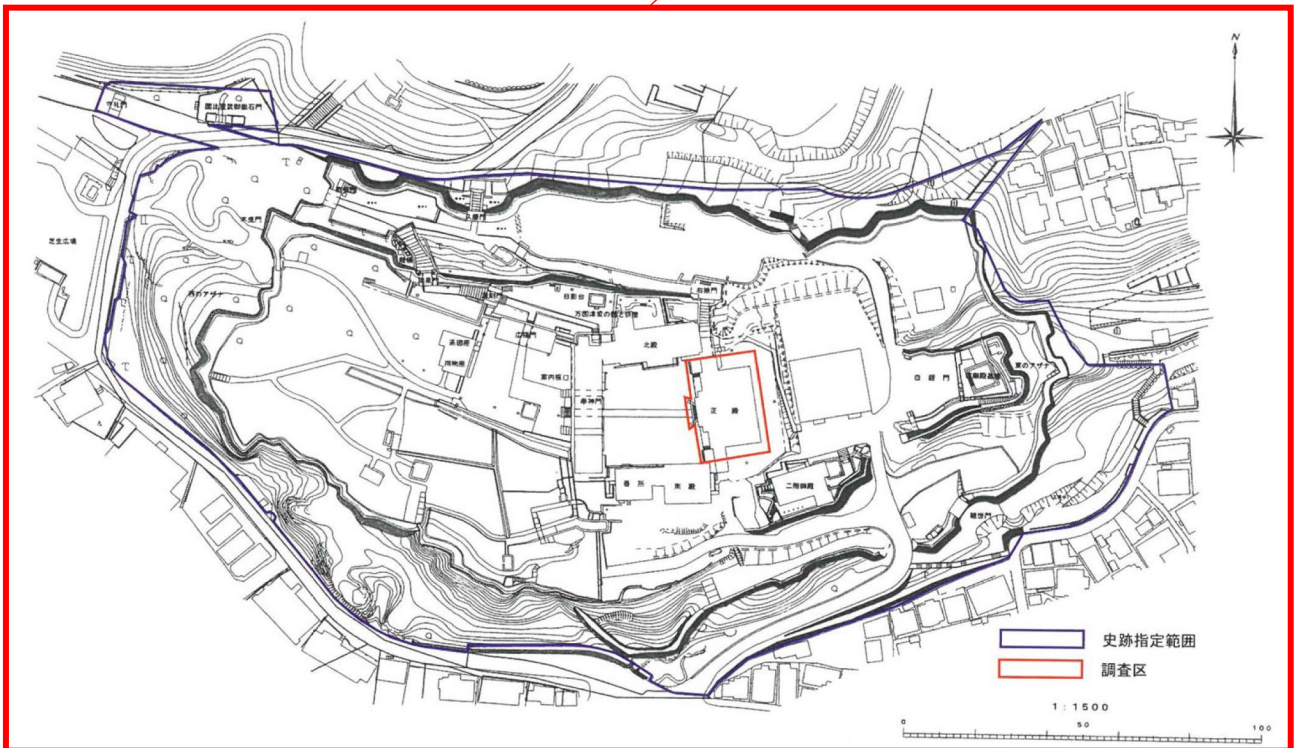
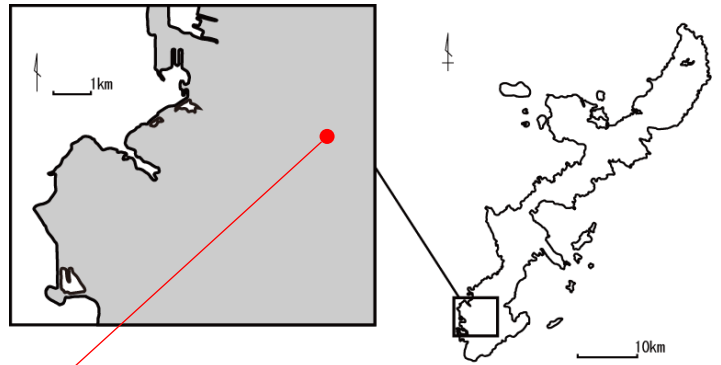
石井龍太（城西大学経営学部准教授）

企画：城西大学経営学部 石井龍太研究室

主催：城西大学水田美術館

共催：沖縄県立博物館・美術館

協力：沖縄タイムス



首里城正殿の位置

【第1期】13世紀後半～1392年？～？

創建時の首里城正殿には不明な点が多い。発掘調査では、後に正殿が立つ場所(発掘調査では「正殿地区」と呼ばれる)の北側にある淑順門西地区にて13世紀後半～14世紀初頭の遺物包含層が確認されている(沖縄県立埋蔵文化財センター2013)。ただし同地点に正殿が存在したかどうかは不明である。

王国の歴史書である『球陽』には、1392年に高楼を建て察渡王が遊観したという記載(球陽研究会1974:162)が見られる。これを最古とする意見もあるが、場所も城名も記述されておらず、また『球陽』は18世紀半ばになってから編纂されたものであり同時代資料ではない。

同時代資料としては、1427年の『安国山樹花木之記碑』がよく取り上げられる。王城の外での庭園整備の記載があることから、王城たる首里城がこの時には存在したことがうかがえる。

「王城外安国山増而高之」(塚田1970:59)

では当該期の首里城はどのような姿であり、また正殿はすでに建造されていたのだろうか。正殿地区とその周辺に目を向けても、15世紀前半に位置づけられる大規模建物は見当たらない。なお正殿地区で確認された最古の基壇の下から、瓦が大量に検出されている。かつて正殿地区の周辺に瓦葺き建物が存在したことをうかがわせる。

この瓦は、概ね14世紀後半以降に登場するとされる「グスク瓦」に属し、中でも九州系瓦(大和系瓦)とされる一群が多い。今日一般に知られる赤い素焼きの島瓦とは規格も色調も異なる。九州系瓦は正殿地区の発掘調査で出土した瓦全体の14%を占めており、トレンチ(発掘坑)からまとまって検出されている。平瓦、丸瓦、軒平瓦、軒丸瓦、雁振瓦が確認され、色調は灰色と褐色を呈し、その比率は平瓦が58:42、丸瓦が56:44とされている(沖縄県立埋蔵文化財センター2016a:168)。

この瓦が葺かれた建物が最古の首里城正殿であるのなら、その屋根は灰色と褐色が6対4の割合で入り混じる景観であっただろう。ただ残念ながら、正殿地区においてこの瓦群が葺かれた建物の遺構は検出されていない。

なお首里城正殿は西面だが、もともとは南面していたという伝承がある。後述する1534年に中国から来訪した使者・陳侃による『使琉球録』では、旧制は南向きであったが、16世紀前半には西向きだったとしている。

残念ながら建物遺構が確認されていないため、その真偽は発掘調査では確定されていない(沖縄県立埋蔵文化財センター2016a:333)が、首里城最古の礎石建物跡が正殿地区後方の御内原北地区にて検出されており、正殿との関係性が注目されている。詳細は後述のコラム1で述べることにする。

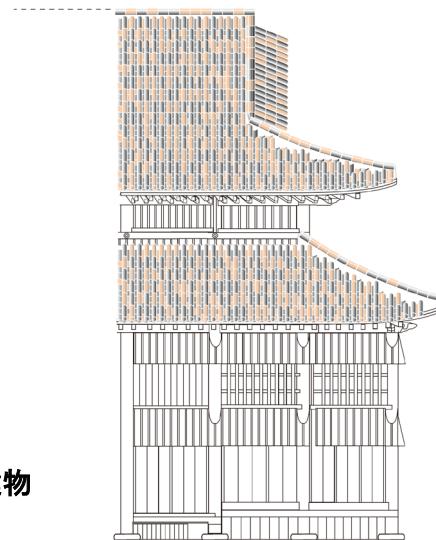


図1 御内原北地区礎石建物
(第1期首里城正殿)復元図

首里城正殿の原点とは —首里城跡の発掘調査成果から見る最も古い礎石・基壇建物跡—

山本正昭

首里城正殿については1985、86年に実施された発掘調査によって5回の建て替えが行われたことが明らかになっており、最も古いとされる正殿に関係した遺構は第Ⅱ期基壇としている（當眞、上原1987）。この第Ⅱ期基壇の構築時期については発掘調査報告書では明言していないものの、14世紀までは遡らないとしていることから、15世紀段階において首里城内では礎石・基壇建物が出現してきたと言える。このことから勝連グスクや今帰仁グスクといった大規模なグスクにおいては14世紀後半から礎石・基壇建物が見られるため、首里城では礎石・基壇建物の導入が50年ほど遅れると言うことになる。他方で、この発掘調査報告書内では高麗系瓦や大和系瓦が出土していることを根拠に、正殿周辺には礎石・基壇建物が14世紀代には存在していたという含みを持たせている（沖縄県立埋蔵文化財センター2016）。

ここで注目されるのは正殿跡から北東約15m離れた場所で実施された発掘調査で確認された礎石と石列遺構である。これらの遺構は柱を据えた礎石6基と礎石の抜き取り痕跡が4か所、北側と東側に高さ約20cmの石列遺構が検出されており、南側と西側は大きく後世の破壊を受けている（図2, 3）。礎石及び礎石の抜き取り痕跡から柱間は120～140cmと南北方向に整然と並び、それと同方向に石列遺構も走っていることから、これらの遺構をまとめて礎石・基壇建物跡である可能性が高いと言える（沖縄県立埋蔵文化財センター2010）。そして、これらの遺構周辺からは高麗系瓦や大和系瓦がまとまって出土していることから、14世紀代まで遡ることが指摘され、更に言うところの時期に瓦葺の上屋を持った礎石・基壇建物が現在の正殿近くに建っていた可能性は十分にあると言える。

残念ながらこの礎石・基壇建物跡の規模については破壊を受けているため判然としませんが、勝連グスクや今帰仁グスクといった沖縄本島に見る大規模なグスクと同様に14世紀後半には首里城にも礎石・基壇建物が存在していたと言える。このことは、「按司」や「よのぬし」、「ていだ」といった在地首長による地域統合が14世紀後半から武力を背景にして進められていく中で、自己の権力をその具現化した象徴として礎石・基壇建物を建造していくが、首里城においてもその一画を担っていたことを示す遺構が確認されたことは大きな成果であると言える。首里台地で最も高い場所に占地する礎石立ちの瓦葺建物は、首里周辺だけでなく当時の那覇湊や銘苅あたりからも望むことができ、当時において在地首長の存在を明示させるのに十分であったことは想像に難くない。

以上から史書に見える三山（山北、中山、山南）へと沖縄本島の在地勢力が14世紀後半に収斂されていく背景を読み込む上で、発掘調査で確認される礎石・基壇建物跡はかなり重要な鍵を握っていると言える。

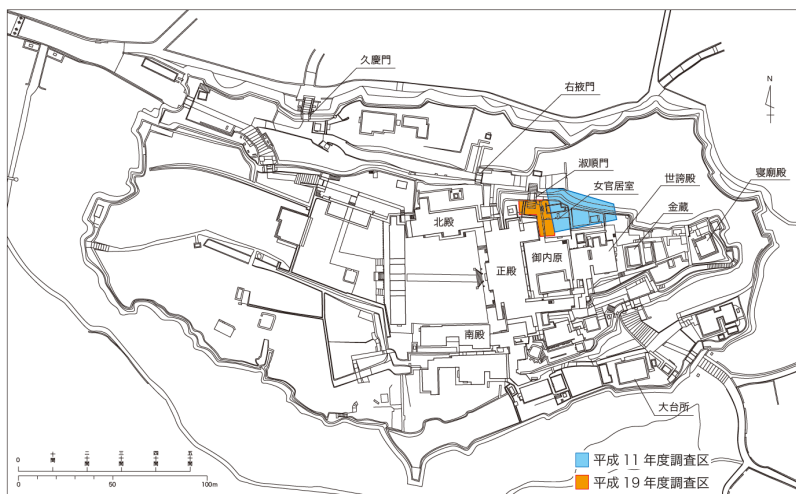
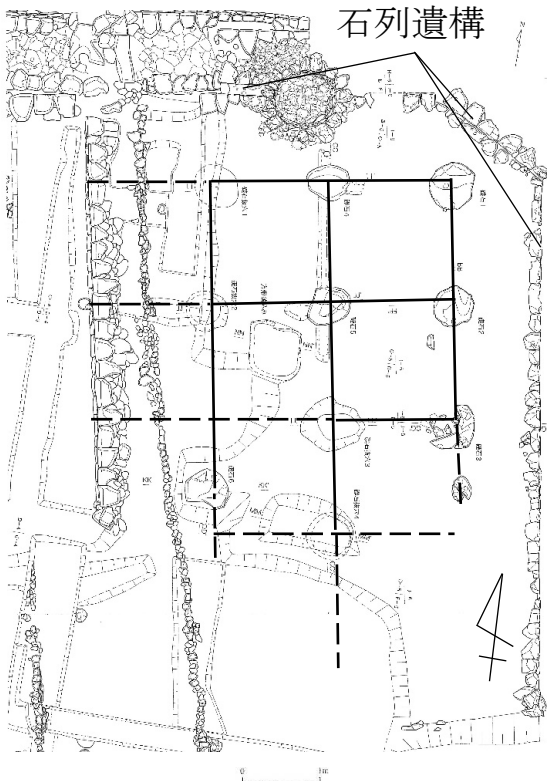


図2 御内原北地区発掘調査地点



1



2



3

图3 御内原北地区出土礎石・石列遺構
1. 確認箇所 2. 平面図 3. 平面写真



【第2期】 ? ~1453年? 1459年?

『球陽』によれば、1453年に首里城は王位継承をめぐる戦乱「志魯・布里の乱」によって火災に見舞われている。ただ文献資料では「府庫」や「倉庫」が被害に遭ったとされるものの、正殿の被災の詳細は不明である。

「満城火起、府庫焚焼」(球陽研究会1974:174)。

また1459年にも火災があったことが『明実録』に記録される。

「禮部奏琉球國中山王尚泰久奏稱本國王府失火延燒倉庫銅錢貨物」(国史編纂委員會)

発掘調査では、首里城内各地で火災に伴うとされる痕跡が確認されている。正殿地区ではⅡ期基壇とされる遺構の化粧石に被熱の痕跡が確認されており、2つの火災いずれかに該当するものと解釈されている(沖縄県立埋蔵文化財センター2016a:3他)。

精巧な石積で構築されたこのⅡ期基壇の上には、どのような屋根景観を伴う建物が立っていたのであろうか。文献資料には記載が無いが、発掘調査では最小規模で短軸約12.6m(約14間)×長軸約22.7m(約25間)の礎石建物があつたと想定されている(沖縄県立埋蔵文化財センター2016a:21)。

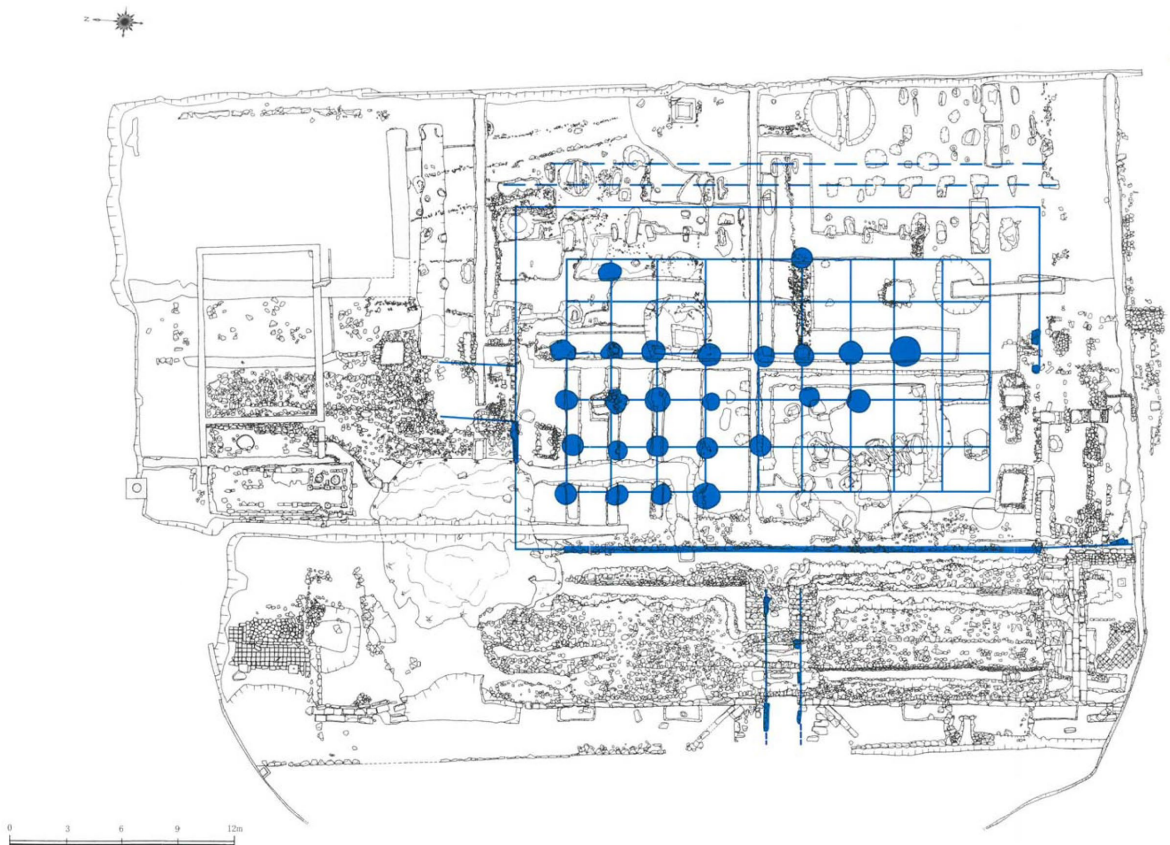


図4 Ⅱ期基壇

【第3期】 ? ~1456年~16世紀初頭

発掘調査では、15世紀中葉に焼失した際の首里城正殿に該当するとされるⅡ期基壇の後、西側に拡大してⅢ期基壇が築かれ、基壇西側に面して石段が設けられている。15世紀中葉~16世紀初頭に位置づけられている（沖縄県立埋蔵文化財センター2016a:333）。

Ⅱ期基壇を焼失させたとされる1453年と59年の二つの火災の間に、首里城に朝鮮人の漂着者が訪れていた。『朝鮮王朝実録』によれば、世祖二年(1456年)一月に軍船で済州島を出発した梁成たちが、二月に沖縄諸島の久米島に漂着し、ひと月後に沖縄島に送られ、世祖七年(1462年)に帰国したという。彼らは沖縄島に到着したひと月後、すなわち1456年4月に首里城へ行き、帰国後にその様子を伝えている。「王城凡三重。外城有倉庫及廐。中城侍衛軍二百余居之。内城有二三層閣。大概如勤政殿。其王擇吉日。往来居之。其閣覆以板。板上以鐵沃之。上層藏珍宝。下層置酒食。王居中層。侍女百余人。」(池谷他2005: 32)。

二層三階建て、屋根は板葺きであったという。そして「以鐵沃之」とあり、これは屋根の板材が錫で覆われていたと解釈されている（安里1996:14、池谷他2005:149, 151）。

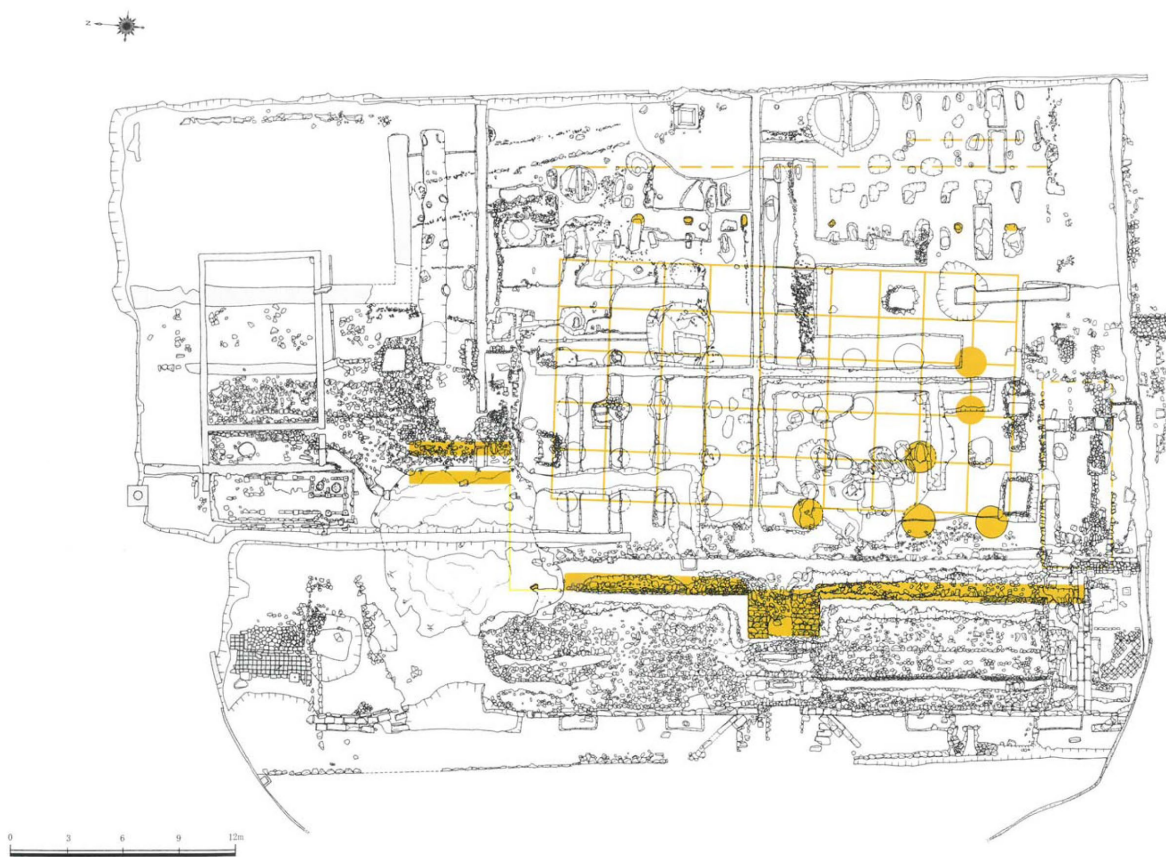


図5 Ⅲ期基壇

琉球王国は16世紀まで東南アジアからシヤム産かマラッカ産の錫を入手し、中国への朝貢品とすると共に、容易に加工できる鋳物素材として、また航海安全のため船のバラストとしても活用していたという(栗国1998:38)。同じものではないが、鹿児島県の仙巖園には錫製の瓦が葺かれた錫門が存在し、白光りする独特の屋根景観を呈している。ただし発掘調査では、この記載を裏付ける遺物は得られていない。

ではⅢ期基壇と、その上の第3期正殿はいつ作られたのか。2度の火災から首里城がいつどのように再建されたのか、あるいは被害が無かったのかどうかは文献に記録が無いが、2度目の火災から間もないころの首里城正殿の様子が『朝鮮王朝実録』に記録されている。世祖七年(1462年)二月四日に宮古島に漂着し、四月から七月まで沖縄島に滞在して帰国した肖得誠たち8名の記録である。

「城有三重。皆石築。城高如我国都城而稍高。城門亦如我国。其城回互。如曲水。兩城相距。如一匹布長。」

「国王居於二層閣。其閣皆着丹朥。覆以板、每鷲頭。以鐵沃之。廊廡周回。連接間數。」(池谷他2005: 35)。

この記録は、1456年の梁成たちの記録とほぼ一致している。となると、『明実録』には「延焼倉庫」とあるのみなので、正殿に被害はなかったのかもしれない。

あるいは、焼失後に同じ様に再建したのかもしれない。二つの資料の相違点は、再建の可能性もうかがわせる。肖得誠たちの記録には錫がかけられた「鷲頭」すなわち大棟飾りが置かれていたと記載されるが、どのような大棟飾りだったか、詳細は不明である。そして「其閣皆着丹朥」とあることから赤く塗られた建物であったと考えられよう。もちろん、火災と無関係に改修された可能性も残されている。

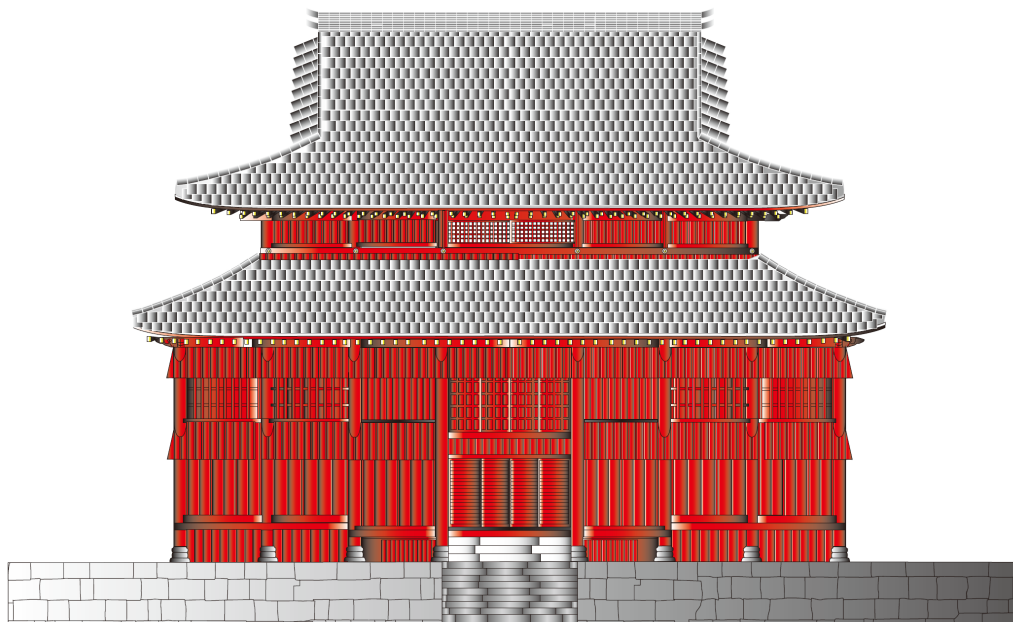


図6 第3期首里城正殿 復元図
※首里城正殿を模して後に建築された玉陵を参考に作成

なおこの時期の正殿を写したとされるのが、首里城西側に位置する王陵「玉陵」である。1501年に築かれたとされ（球陽研究会1974：191）、被葬者を納めた石造建造物は屋根が扁平な板石で葺かれていることから、板屋根を模したものと考えられている（那覇市HP他）。

発掘調査成果と比すれば、Ⅲ期基壇とⅣ期基壇の境の時期に玉陵は築かれたことになり、正殿は増築、王陵は新築と相次いで工事されたとも考えられよう。



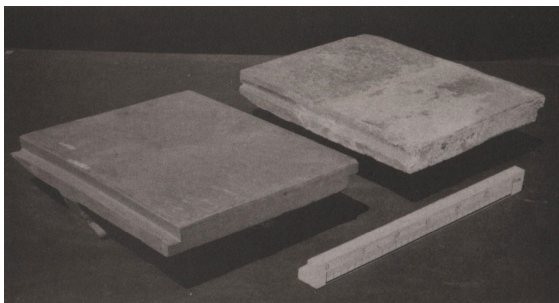
1



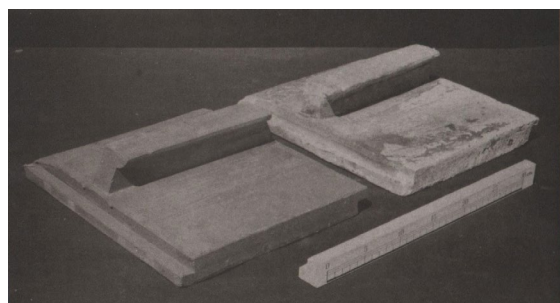
2



3



4



5

図7 玉陵

1. 全景
2. 板屋根の様子
3. 復元前の屋根検出状況
4. 玉陵の板瓦(表面 左：新補材 右：当初材)
5. 玉陵の板瓦(裏面 左：新補材 右：当初材)

【第4期】 16世紀初頭～1660年

文献資料には記載がないが、その後も首里城正殿の増築は繰り返されており、16世紀初頭～17世紀後半に位置づけられるⅣ期基壇が更に西側に拡張して築かれている。

Ⅳ期基壇は雑石積みで仕上げられ、さながら補強用の裏込めの様相を呈し、Ⅱ期、Ⅲ期基壇とは差が見られることが指摘されている（沖縄県立埋蔵文化財センター2016a:333）。化粧石が元々なかったのか、あるいは撤去されたのか、明確な結論は出ていない。

第7期の項で詳述するが、首里城は20～40年程度のサイクルで改築が繰り返されたと推察される。Ⅲ期基壇が概ね半世紀の存続期間とされることから、Ⅲ期基壇からⅣ期基壇への移行は上屋の改築に伴う増築であった可能性を考えておきたい。

また存続期間は16世紀初頭～17世紀後半と約2世紀に渡っており、上述の再建サイクルに従うならば恐らくその間に上屋は4回以上の修築が行われたと推察される。

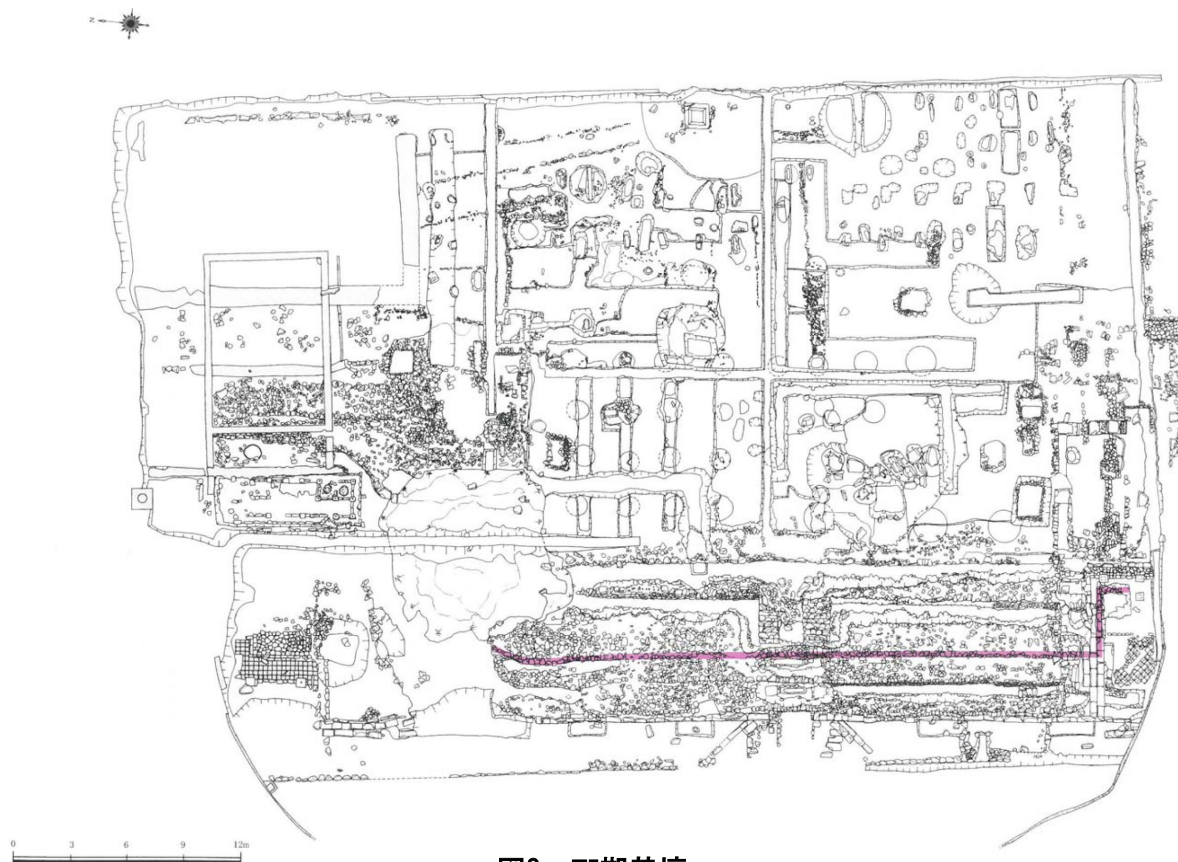


図8 Ⅳ期基壇

この第4期正殿は文献資料に記録がある。『朝鮮王朝実録』の記載から約一世紀後、1534年に来訪した中国明朝からの冊封正使・陳侃による『使琉球録』では、正殿はもともと南向きだったが、現在は西向きであるとしている。また王城は正面（西側）7間、奥行（南側）7間で、二層建てであること、建物は皆板葺きであること、屋根に獸頭は無いことが記される。

「王之居舍向南者七間向西者七間。以南者旧制、不利於風水。反以西者為。正殿閣二層、上為寢室、中為朝堂、末与臣下坐立」

「皆以板代瓦」

「王屋亦無獸頭」(原田1995:220-221)

『朝鮮王朝実録』の記録では錫を貼った板材が使われていたが、『使琉球録』では「板」とあるのみで、色調はじめ詳細は不明である。琉球王国は東南アジアから盛んに錫を輸入していたが、ポルトガル勢力がマラッカの錫を管理するようになった16世紀前半には貿易記録から消える(栗国1998:38)。琉球王国と東南アジアとの交易関係はその後低調になっていくことが知られている。もし正殿の屋根材が変化したのなら、その背景にはこうした国際情勢の変化が反映されている可能性もあるだろう。

なお獸頭は無いとされる記述は、『隋書』流求伝(656年)にみられる琉球の習俗の記載「人間門戸上必安獸頭骨角」を念頭において記載されたと考えられる。

また『球陽』によれば、1508年に石高欄と龍柱が丹墀（宮殿前の庭の意、すなわち正殿の前）にはじめて設置されたとされ(球陽研究会1974:192)、IV期基壇を含めた増築に伴う敷設であった可能性も指摘されている(安里1996:17)。ただし龍柱の設置場所など詳細の記載はなく、正殿の正面に対で置かれた後世の首里城正殿イメージに近いものであったのか、龍柱の向きがどうであったのかは不明である。

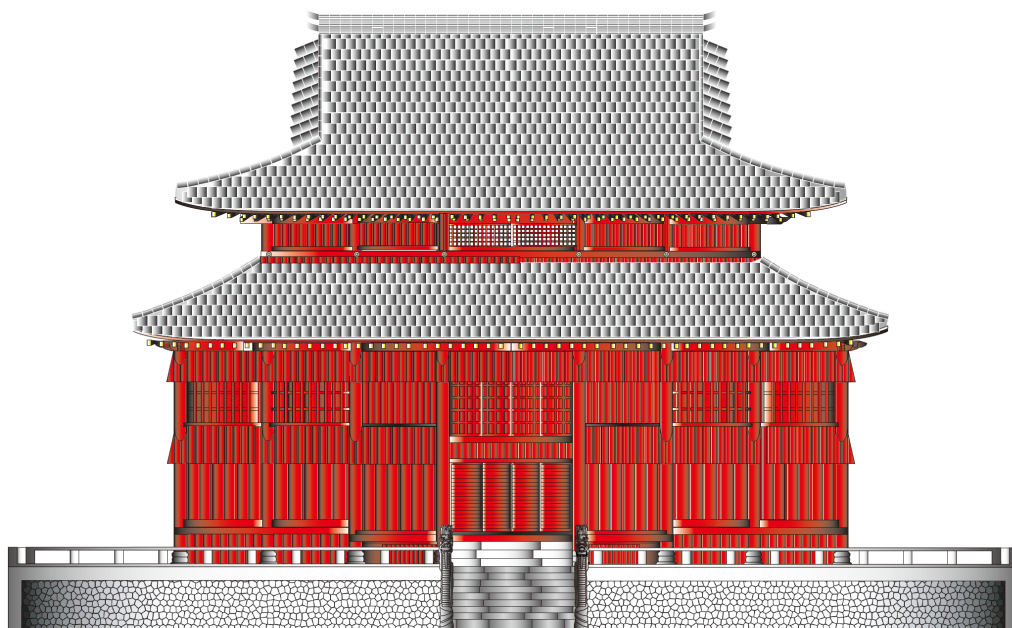


図9 第4期首里城正殿 復元図
※錫瓦が維持された可能性、石高欄や龍柱が第5期以降と同様のものであったと想定して作成。

【第5期】 1670～1709年

尚質一三年（1660年）9月27日、失火により首里城は焼失し、正殿も失われたと『球陽』に記載される。「焼盡王城宮殿」(球陽研究会1974:221)。

再建には時間を要し、火災発生時に王位にあった尚質王の代にはかなわず、続く尚貞王代に入った尚貞二年（1670年）に完成したことが『球陽』に記載されている。また再建時に屋根に手が加えられ、おそらくは15世紀半ば以来200年ぶりに正殿は瓦葺きとされた。その目的は美観と頑健さにあったと推察される。またかつて瓦葺きであったことは忘れられていた可能性が高いことも『球陽』の記録からうかがえる。

「自古国殿竝宮室楼台皆用木板蓋之。今番改蓋以瓦以致壮丽鞏固。」(球陽研究会1974:231)

1683年に中国明朝から派遣された冊封使・汪楫による『使琉球雜録』巻二には、奉神門と正殿は向い合せにあり、共に7間と記載されている。これは第4期と同じ規模である。また正殿は西を向き、殿の上には楼があると記載される。

「宮門曰奉神門与正殿相向皆七間。殿西向。殿上有楼。」(原田1997:349)

なお琉球の王殿を7間に作るのは儒教の規律上違反行為であり、格上の朝鮮国は5間を厳守させられているものの、特に咎められることはなかった様だ(茂木2020b:64)。それどころか、正殿は第6期以降、さらに拡張していくのも興味深い。1704年には大規模な修補が行われ、翌年成就したと『尚姓家譜(伊江家)』『武姓家譜(嘉陽家)』に記載される。1670年の再建から30年余り経ち、耐用年数が来たためであろう。

発掘調査ではV期基壇が17世紀後半～18世紀初頭に位置づけられており、この再建時に再び西側への増築が行われた可能性が考えられる。

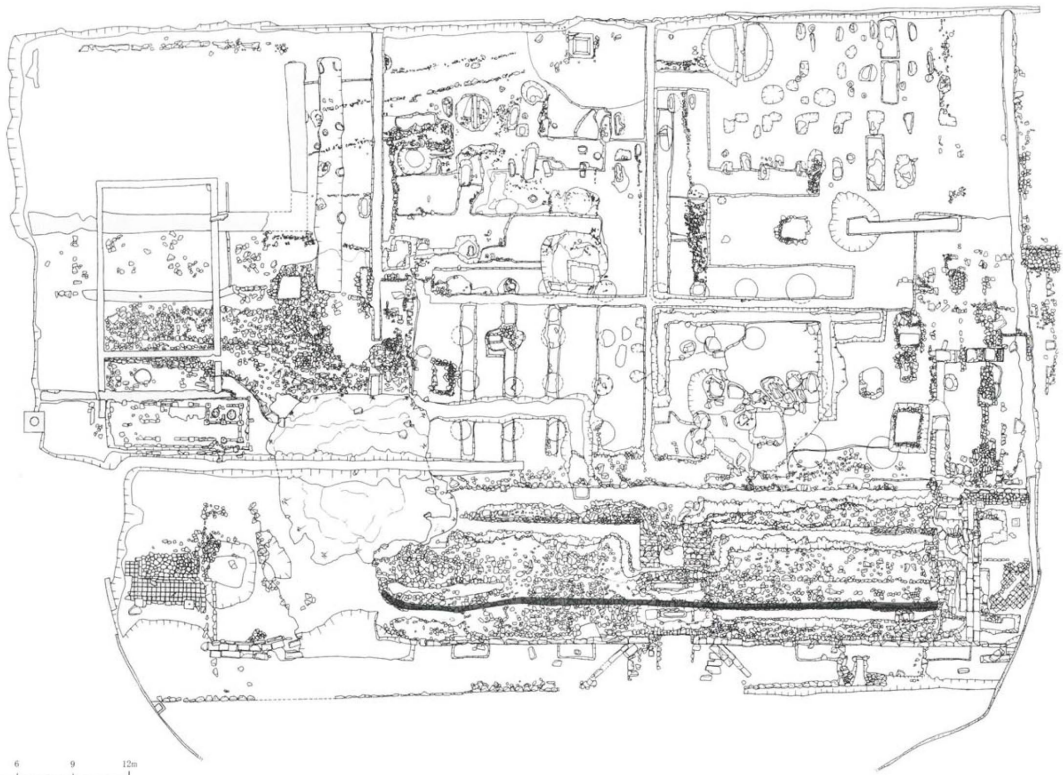


図10 V期基壇

1670年以後も、正殿には手が加えられ続ける。上述した陳侃の『使琉球録』（1534年）では獸頭はなかったとされるが、1682年には初めて「五彩の竜頭彫葺」すなわち施釉された竜の頭の焼き物を置いたという記載が『球陽』に見られる（球陽研究会1974:241）。当時の詳細な形状は不明だが、18世紀前半期に位置づけられる『首里古地図』『首里城古絵図』『首里城並諸方絵図間付差図帳』には、大棟の左右に向かい合わせて据えられた後世の竜頭と変わらない形状で描かれている。琉球大学風樹館には目玉部分と思われる施釉陶器の破片資料が収蔵されている。竜頭は近代期までに漆喰製に代わっていると指摘されるが（西村1993：131）、いつまで陶製であったのかは不明である。

残念ながら正殿地区の発掘調査ではこの時期の包含層や一括資料は検出されておらず、使用されていた瓦を特定するのは難しい。ただこの頃の瓦生産の変遷や、首里城跡の他の地区の調査成果から、灰色と褐色のまだら模様が大半を占め、僅かながら赤色や小豆色が加わるものであったと推察される。

第5期首里城正殿の様子を描いた絵図史料は未確認だが、東京大学史料編纂所所蔵『首里城並諸方絵図間付差図帳』はその可能性が指摘されている。この図帳は首里尚家が所蔵していた『御城並諸方絵図間付差図帳』を原図として、維新史料編纂会の森谷秀亮によって1934年にトレースされたものとされる（黒嶋2020:25-28）。7枚の絵図が所収され、その一枚に首里城正殿が描かれている。そして原図は、1701年から首里王府が始めた主要施設の絵図・差図製作事業に関わるもので、1713年に行われた風水見分の結果が記されていないことから1713年以前の作図であり、1709年以前の焼失前の首里城を描いたものとする見解が示されている（安里2013：44）。

大棟には竜頭が設置され、正面階段は左右並行で、龍柱は正面向きである。こうした諸要素は、他の史資料からうかがえる第5期首里城正殿のあり方として矛盾しない。ただ研究者によっては1712年以降に位置づける唐破風が描かれることから、第6期以降の様子を描いた可能性も残されている。そして石垣は青く、壁と柱は黒く、屋根は赤色で着色されている点は注目される。当時の屋根瓦が灰と褐色であったことからすると、色調は第5期正殿の実情を表していない可能性が高いことになる。一緒に描かれたソテツは、茶色の幹、緑の葉に描かれており、実態と乖離した着色とも言い切れないのだが、赤い屋根、黒い壁に着色されたのは何故であろうか。

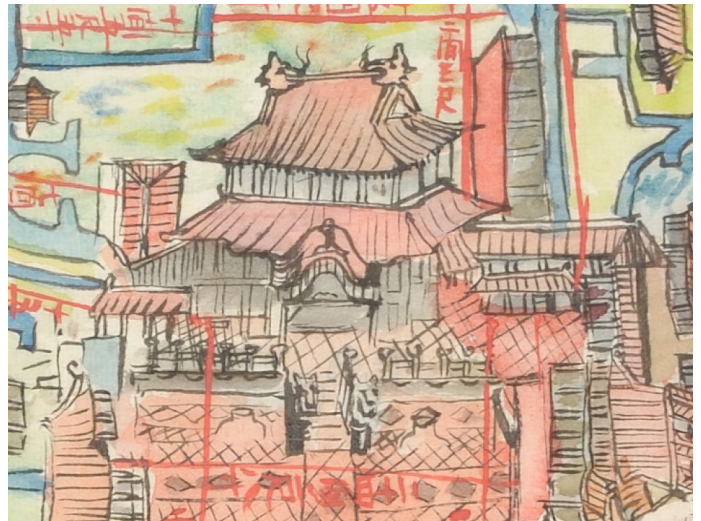
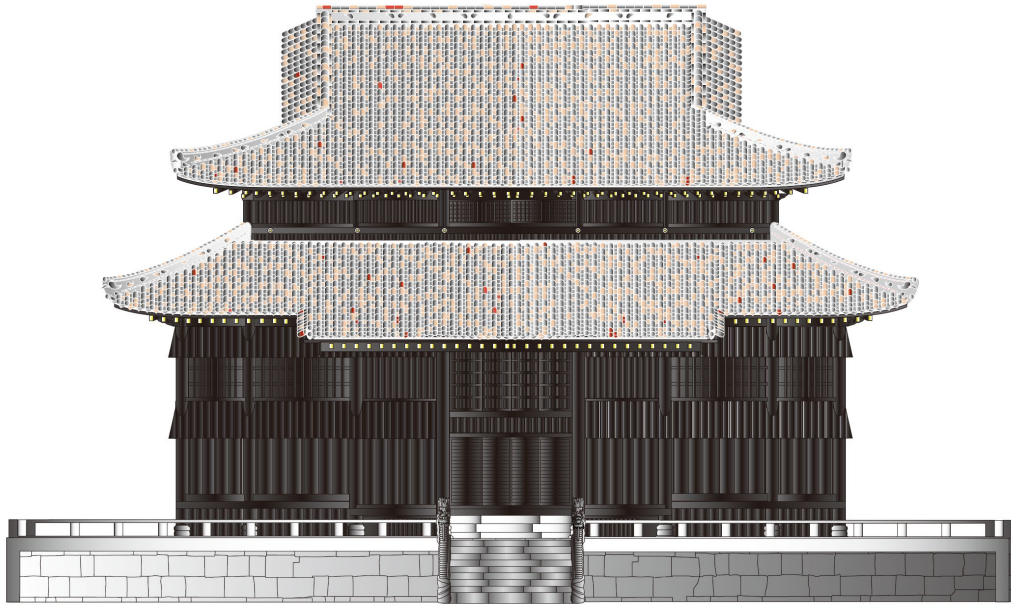


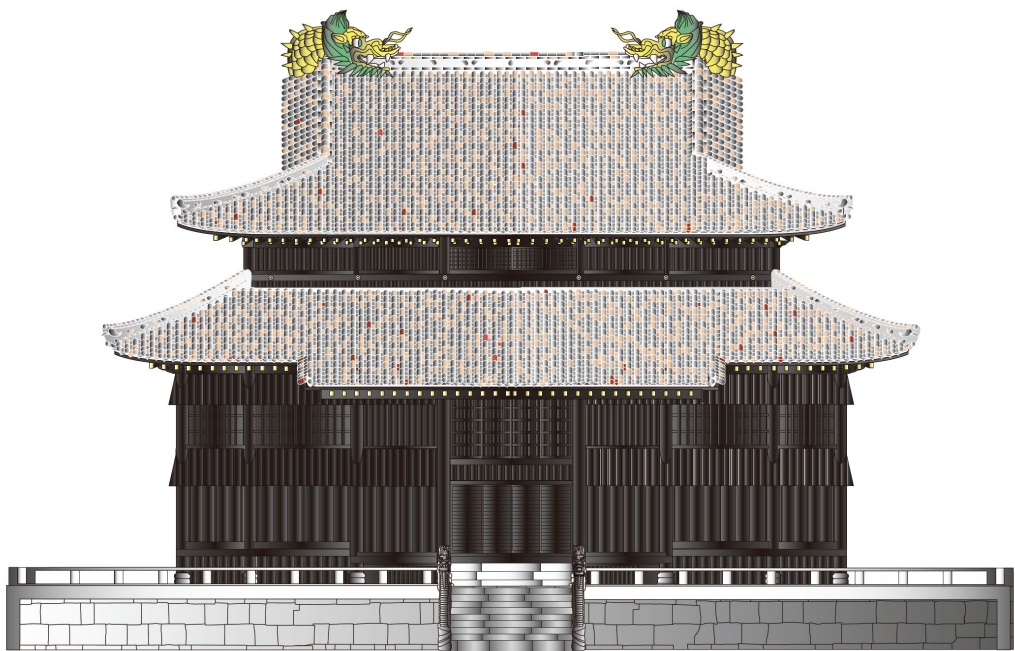
図11 『首里城並諸方絵図間付差図帳』より、『首里城正殿図』

(東京大学史料編纂所所蔵)

1. 全体 2. 部分拡大



1



2

图12 第5期首里城正殿 復元图
1. 1670~1681年 2. 1682~1704年?

コラム2

琉球近世瓦の生産と消費 (15～17世紀)

17世紀後半から改めて瓦葺きとなった、首里城正殿の屋根景観はどのようなものだったのであろうか。

琉球諸島の瓦は14世紀代のグスク時代まで遡るが、現在「島瓦」と呼ばれる素焼きの赤い瓦の直接のルーツとなるのが、15世紀以降に生産された「琉球近世瓦」「明朝系瓦」等と呼ばれる瓦である。17世紀後半に首里城正殿に葺かれたのも、この瓦群であったはずだ。

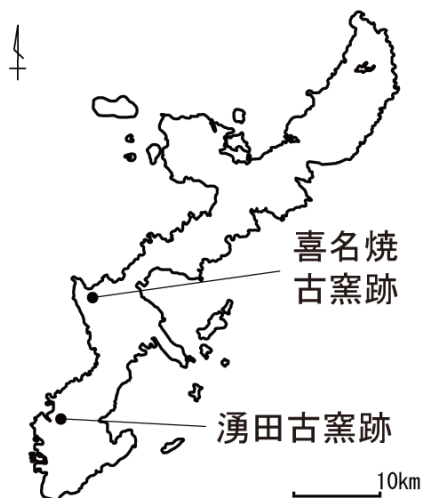


図13 沖縄島における窯跡分布図(16～17世紀)



図14
湧田古窯跡出土軒瓦

湧田窯での灰・褐色瓦の生産

琉球諸島の瓦生産は、16世紀には瓦奉行が設置され、王国による官営事業になっていったと推察される。那覇市泉崎の湧田古窯跡は、王府による初期の大規模な官営瓦工場の遺跡と考えられる(沖縄県教育庁文化課1993、1994、1997、1999)。

湧田古窯跡で出土する瓦は還元焼成という製作法が採られており、色調は灰色ないし灰色になり切らない褐色を呈し、この点のみ上述したグスク時代の瓦と同様だが、製作技法も規格も大きく異なる新しい時代の瓦である。

喜名窯での小豆色瓦の生産

那覇だけでなく、沖縄島読谷村に築かれた喜名窯でも瓦生産は行われていた。喜名窯は沖縄産無釉陶器(荒焼)と呼ばれる陶器の生産が行われており、瓦にも同じ土、同じ焼成法が用いられ、色調は小豆色で、硬質なものが生産された。見ようによっては赤色とも見えるが、現在の赤瓦とは明らかに異なる陶質瓦である。

喜名窯の瓦生産は湧田窯と密な関係にあったと考えられ、おそらくは技術の指導や移転も行われていた(石井2016:15-28)。残念ながら稼働年代は今なお不明な点が多く、概ね17世紀から18世紀頃、湧田窯で灰色や褐色の瓦が生産されていた時期の内いずれかに位置づけられると推察されるが、断定は難しいのが現状である。ただ出土量は少なく、おそらくは一時的に生産されたのみで供給量は少なかったと推察され、小豆色の瓦が屋根景観に及ぼした影響は限定的だったのであろう。



図15
喜名古窯跡出土軒瓦

琉球近世瓦の首里城内での消費

第5期に確実に位置付けられる瓦の一括資料は正殿地区では得られていないため、正殿に葺かれた瓦を考えるには他遺跡での消費動向の調査例を参照する必要がある。

1670年の再建は、正殿に琉球近世瓦が初めて用いられた改築であったため、使用された瓦はすべて新品としがちであるが、古材の転用が無かったとは言い切れない。何故なら首里城内で最初に琉球近世瓦が葺かれたのは正殿ではないと考えられるからである。

首里城跡各所で出土する事例を見る限り、1670年に再建された正殿も、灰色と褐色のまだら模様、僅かながら赤色や小豆色が加わるものであっただろう。特に年代に近い淑順門西地区の比率は参考になるであろう。

西のアザナ地区

14世紀後半～16世紀の堆積層から瓦が折り重なるように出土しており、平瓦、丸瓦の出土比率が屋根に葺かれる際の使用比率と一致することから、どこかの建物で使用されていた瓦が一括廃棄されたものであると解釈されている。また出土した瓦の色調は灰色70%、灰褐色19%、褐色11%と報告されている（上原1994：153-154）。この瓦群が葺かれた屋根景観は、全体的に灰色ながら1～3割の褐色を含むまだら模様であったことがうかがえる。



図16
西のアザナ地区出土軒丸瓦



図17
銭倉東地区出土軒丸瓦

銭倉東地区

湧田窯で生産された灰色瓦がⅢ層からまとまって出土しており、年代は16世紀代とされている（沖縄県立埋蔵文化財センター2016b）。報告書では灰色、赤色、赤褐色、喜名系（小豆色）に分類されており、Ⅲ層では丸瓦が84：9：0：0、平瓦が170：28：2：0と報告されている。灰色の瓦が圧倒的に多く、またこの時点では喜名窯から瓦は供給されていないことがうかがえる。

淑順門西地区

17世紀代を下限とする南区Ⅲ層（沖縄県立埋蔵文化財センター2013：250）にて、湧田窯の瓦と喜名窯の瓦が共伴している。

軒丸瓦と軒平瓦の色調は、灰色、褐色、褐色陶器質、赤色、喜名窯系（小豆色）に分類されている。南区Ⅲ層の状況を見ると、軒丸瓦の出土点数の内訳は13：10：0：0：2、軒平瓦は7：6：7：1：1となっている。

丸瓦と平瓦の色調は、灰色、褐色、赤色、陶器質、喜名系（小豆色）に分類されている（陶器質は陶器質と陶器質（マンガン釉）、喜名系は陶器質と軟質褐色に細分されているが、ここではまとめて集計する）。南区Ⅲ層の状況を見ると、丸瓦の出土点数の内訳は51：59：5：0：5、平瓦は113：60：14：23：15となっている。灰色と褐色が主体となり、赤色や小豆色が僅かに混在する様子がうかがえる。



図18
淑順門西地区出土軒平瓦

【第6期】1712年～？

1670年に改めて瓦葺きとなった首里城正殿は、1704年に大規模修理されている。この時に何らかの改変が加えられたかどうかは記録にない。

そして修理から間もない1709年、『球陽』によれば尚益王が即位して20日目に火災に見舞われている。

「国殿及南北諸殿盡遭焼燼」(球陽研究会1974:257)

再び王の交替期に焼失した上、同年には台風にともなう大飢饉が発生し4000人近い死者が出、盗賊も発生していた様だ(球陽研究会1974:257)。再建は急がれ、完成は1712年と『中山世譜』に記録され、同年に尚敬王が即位している。

「因按司向風彩等重修王殿告成而遷于新殿」(横山1940:131)

発掘調査の成果と比較すると、この時期に比定される基壇は18世紀初頭以降に位置づけられているVI期基壇であろう(沖縄県立埋蔵文化財センター2016a:333)。再建に当たり、改めて増築が行われたことがうかがえる。正面階段は一部の石材が残るのみだが確認され、III期基壇の階段より幅広にも見え、後の末広りの形状に既になっている可能性も考えられよう。ただし後述する18世紀代初頭の絵図史料では左右並行階段に描かれている。

なおこのVI期基壇は「VII期基壇化粧石の裏込めのようにみえる雑石積み」であることから、後続するVII期基壇と一体のものであるという意見もある(安里1996:17-18)が、VII期基壇に伴う石階段の下に石段が残存すること、正面石積みにつながる南北面に石垣が取り付くこと、南西側で南殿のV期基壇と接続することから、VII期基壇より前の基壇とされる(沖縄県立埋蔵文化財センター2016a:22)。

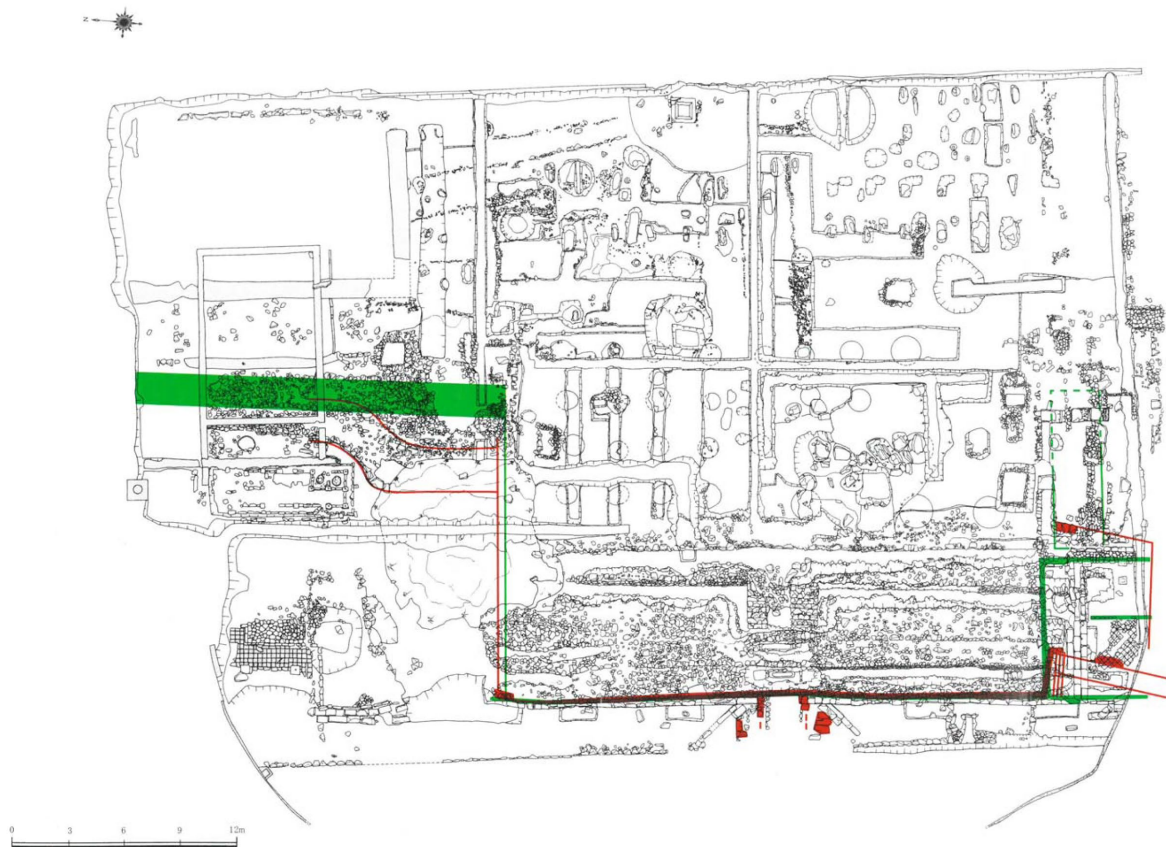
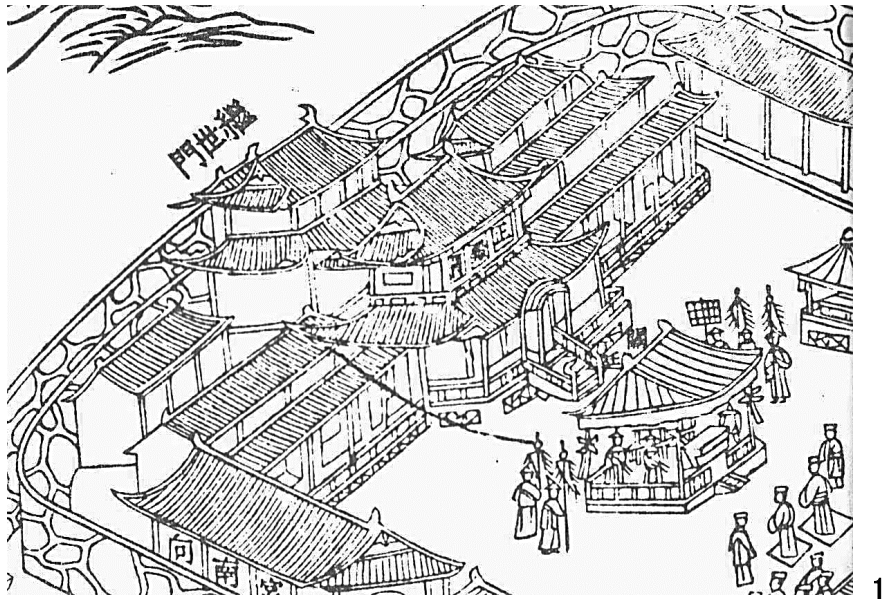


図19 VI期基壇

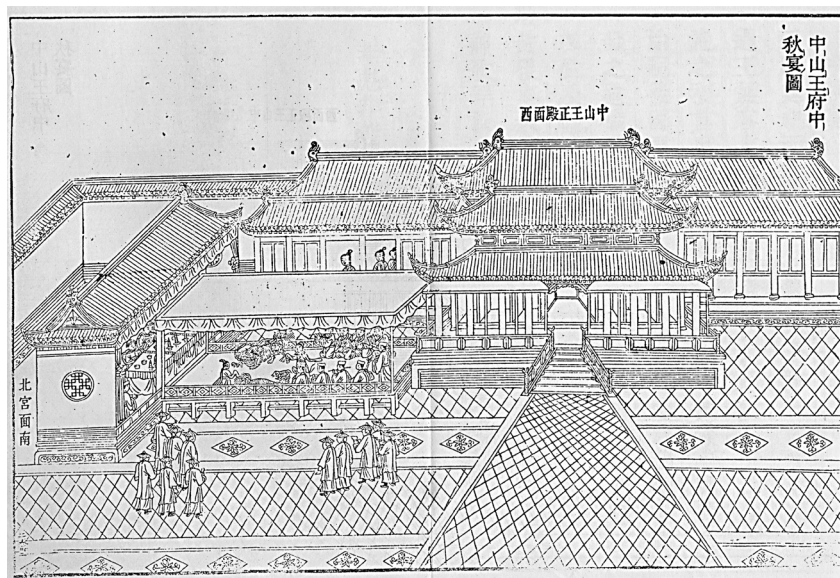
基壇の増築に伴って規模も拡大されたとし、中国から来琉した冊封副使・徐葆光による『中山伝信録』（1719年）には正殿の間口が9間と記録され、『使琉球録』（1534年）や『使琉球雑録』（1683年）に記される7間より広い。後の正面11間×奥行7間から両外周の2間分を除いた基本形がこの時完成していたとされる（安里1996:15）。なお発掘されたVI期基壇の南北方向の横幅は、これ以降に位置づけられるVII期基壇と比べほとんど変化しないことから、後世の正殿より外周が広く取られていたであろう。

ただ同じ徐葆光による『冊封全図』『中山伝信録』の絵図では正面7間に描かれ、一間ごとに小部屋に描かれている。琉球の王城が5間を超えて作られるのは規律違反であったが、小部屋の連なりならば違反ならず、これは作者の徐葆光の周到なごまかしだったともされる（茂木2020b:64）。

そして『中山伝信録』（1719年）の正殿の絵図には、正殿を特徴づける正面の唐破風が描かれており、この時期までに登場したことがうかがえる。ただ後年よりやや小ぶりである。また創建年を明確に示す資料は確認されていないが、玉座の位置の分析から1712年の再建時に唐破風があるとする意見もある（伊從1997:15）。『冊封全図』を見る限り、屋根は横(南北)方向の瓦葺きだった様だ。これは1768年の工事記録『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』でも同様である。



1



2

図20 『中山伝信録』に描かれた首里城正殿

1. 「冊封中山王図」(部分)
2. 「中山王府中秋宴図」

正殿地区の発掘調査ではこの時期の包含層や一括資料は検出されておらず、再建に使用された瓦を特定するのは難しい。他遺跡の状況を踏まえると、再建当初はそれ以前とほとんど変わらない、灰色と褐色が大半を占める屋根景観であろうと推察される。ただ修理を繰り返すうちに、軒瓦を中心に赤色の瓦が徐々に割合を増していったことがうかがえる。

第6期の首里城正殿は、『中山伝信録』の他に着色された絵図史料が複数残されている。徐葆光による『冊封全図』（1720年）に掲載された正殿は黒色の瓦屋根として描かれており、棟両端には緑色の鯨と思しき飾り瓦が、降り棟には黒色の竜の飾り瓦が配され、後の屋根に見られる降り棟端部の獅子頭は見られない。唐破風の一部を除き壁や柱も黒色である（茂木2020a:22-23）。『冊封全図』の副本とされる（茂木2020b:60）『中山伝信録』（1719年）に掲載された絵図『中山王府中秋宴図』（図20-2）には、色は不明ながら正殿の棟両端に竜頭とも取れる飾り瓦が描かれ、下り棟には飾り瓦は描かれていない。こうした資料を踏まえると、瓦の色調のみならず、棟飾りも後世のものとは異なる可能性がある。ただ第5期の項で述べた通り、この時期には大棟の左右に向かい合わせの竜頭が据えられていたと考えられることから、屋根飾りについては実態と異なる描かれ方であった可能性も考えられる。

また1700年代初頭頃の記載情報を基本にしたとされる『首里古地図』にも首里城が描かれている。正面階段はハの字形になっており、『中山伝信録』より後世の状態を描いたものであろう。そして正殿はじめ城内の建築、さらに円覚寺や天界寺の屋根はほぼ全てが濃紺色に、壁は赤色に塗られている。現存する『首里古地図』は1910年に複製されたものであるためオリジナルの色調が正確に反映されたとは限らない。また建物の部位ごとに定められたルールに従って着色されたのみとも考えられる。それでも実際の色調から大きく乖離した着色がなされたとは考えにくい。

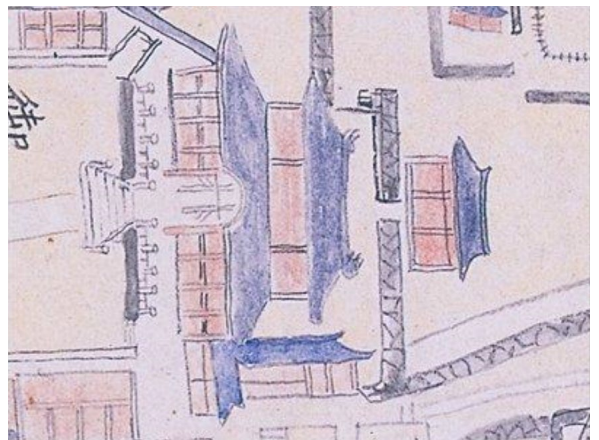
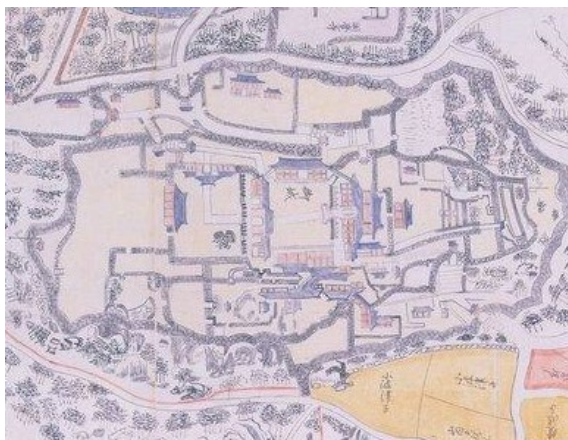
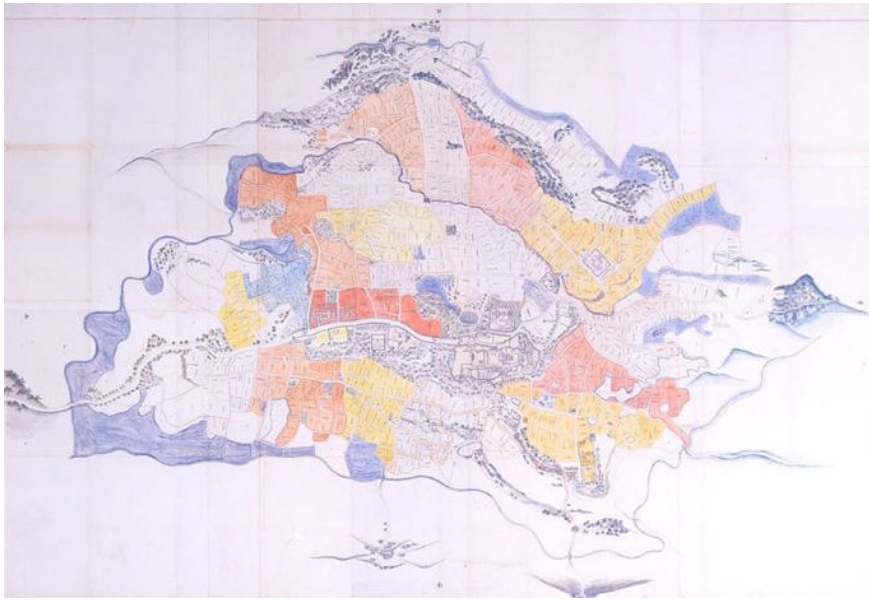
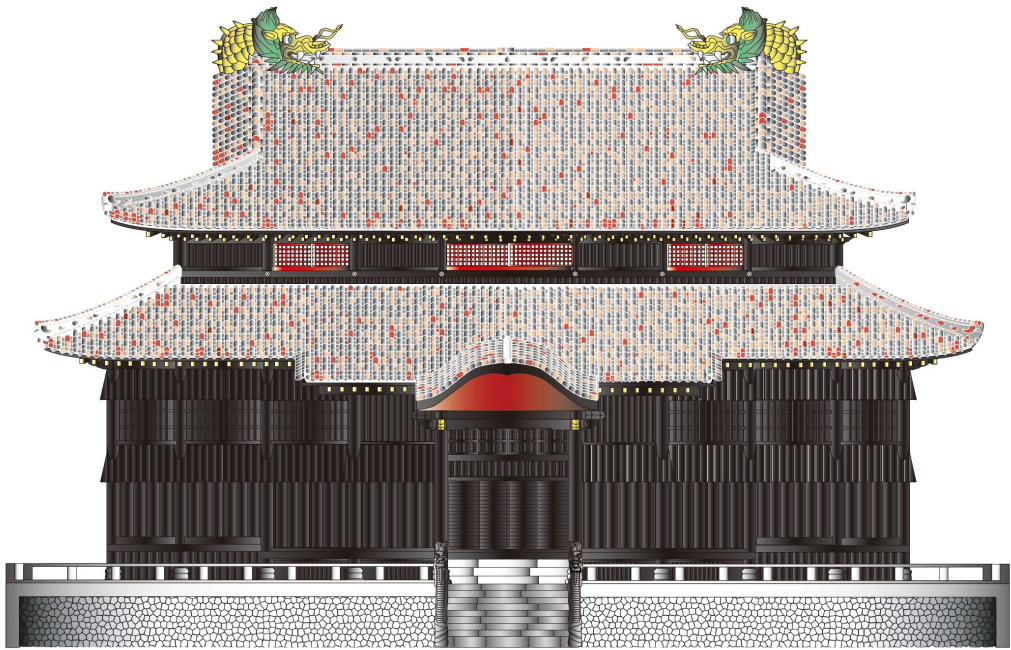
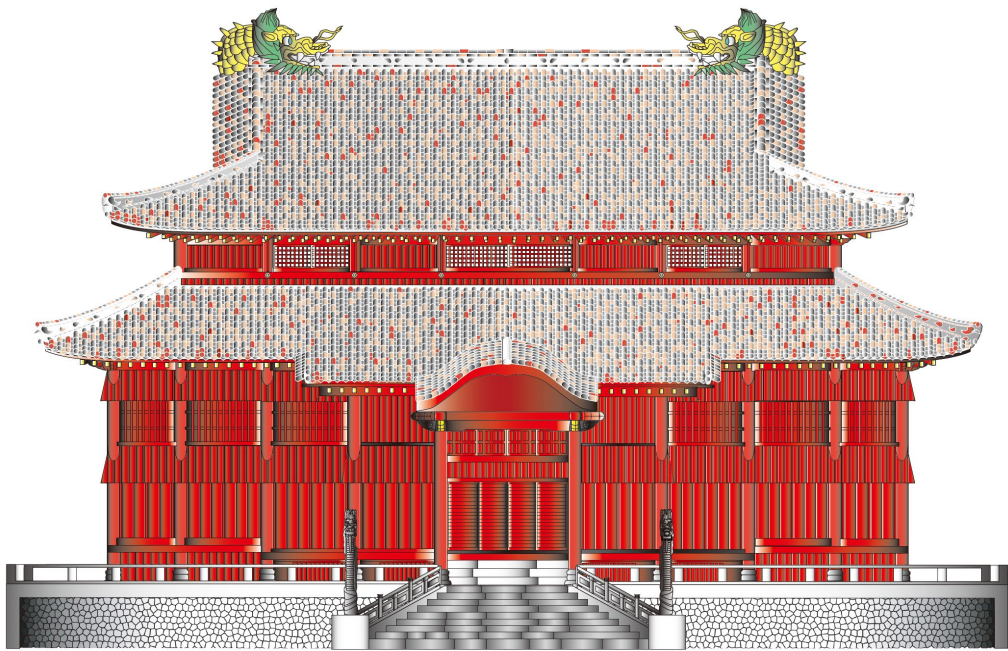


図21 『首里古地図』に描かれた首里城正殿
（沖縄県立図書館所蔵）



1



2

図22 第6期首里城正殿（再建当初） 復元図

1. 『冊封全図』に基づいて作成
2. 『首里古地図』に基づいて作成



コラム3

琉球近世瓦の生産と消費 (18~19世紀)

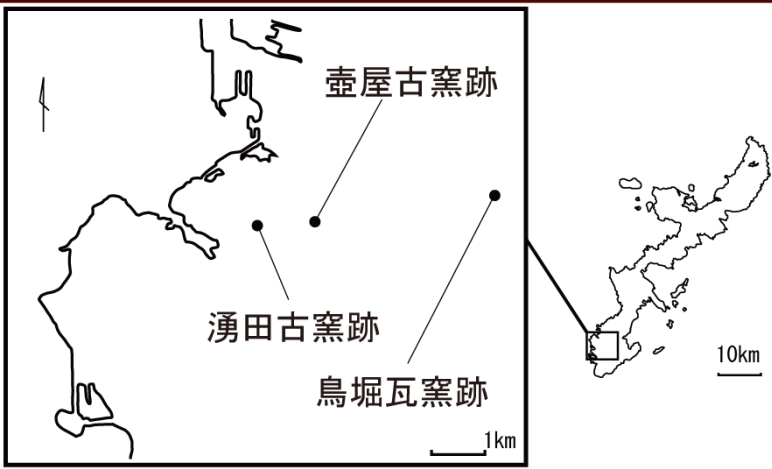


図23 沖縄島における窯跡分布図 (18~19世紀)

1712年の再建時も首里城正殿は瓦葺きにされたと考えられるが、この時の屋根景観については、赤色瓦の登場時期を巡る複雑な課題がある。

壺屋窯の成立と瓦生産

1682年、灰色や褐色の瓦の中心的生産地だった湧田窯が、沖縄島各地の窯と共に牧志に統合されると『球陽』に記録される(球陽研究会1974:241)。現在も窯業地として知られる那覇市の壺屋の成立に関する記録とされる。湧田窯よりも首里に近く、那覇港にも近いいため資材の搬入にも製品の搬出にも便利な立地といえるだろう。

この壺屋で生産されたと考えられる瓦には、灰色・褐色のものや赤色のものがある。近現代期には灰色・褐色瓦の生産は行われていないことから、どこかの時点で赤色瓦へと生産が移行したのであろう。おそらく、開窯当初の17世紀後半からの一定期間は、壺屋窯でも灰色・褐色の瓦の生産が行われていたと考えられる。そしていずれかの時点で、それまで用いられてきた灰色に焼き上げる還元焼成から、赤色に焼き上げる酸化焼成へと技法が変更されたのであろう。

灰色から赤色への移行時期を考える上で、よく知られた資料がある。1950年代に民家の屋根で発見された、焼成前に「乾隆三年(1738年)」とヘラ書きされた赤色の丸瓦(図24 大川1962:116)は、現在のところ年代が確実に分かる最古の赤色瓦となっている。壺屋窯が開かれたとされる1682年から、乾隆三年銘丸瓦が生産された1738年までの間に、赤色瓦の生産は始まったと考えることが出来そうだ。

またこの赤瓦が生産されたのと同様頃、1737~1750年に間切調査が行われ、その成果に基づいて製作された『間切図』(沖縄県立博物館・美術館2019:48)に描かれた建築の屋根は赤色に着色されている(図25)。ただし首里城の屋根は黒色で着色されているのも注目される。



図24 乾隆三年在銘瓦

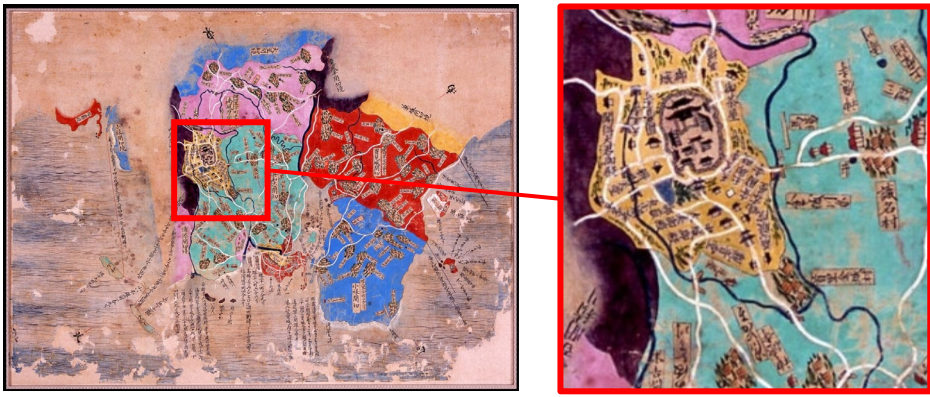


図25 『間切図』 (沖縄県立博物館・美術館所蔵)





図26 鳥堀古窯跡採集平瓦融着資料
(琉球大学博物館(風樹館)所蔵)

鳥堀窯の瓦生産

瓦生産は那覇市の鳥堀でも行われていた。窯跡の発掘はなされていないが、灰色に焼けた瓦片が採集されている。中には融着した生産失敗品も含まれており、確かに窯があったことがうかがえる。鳥堀窯は『首里古地図』に記載されており、18世紀前半には存在したと推察される。

石垣島の瓦生産

石垣島では、1694年に初の窯業生産地である名蔵(なぐら)窯が開かれる。名蔵窯は1732年まで稼働していたとされ、遺跡からは灰色や褐色の瓦が採集、出土されている。

なおそれ以後に開かれた黒石川(ふーしな)窯からは陶器生産と統合したとされ、遺跡からは小豆色や暗赤色を呈する瓦が出土する。すなわち石垣島の赤色瓦は、名蔵窯が閉じられ、黒石川窯が開かれた1730年代から生産されたと推察される。



図27 石垣島における
窯跡分布図(17~19世紀)



図28 石垣島における琉球近世瓦
1. 名蔵瓦窯跡採集軒平瓦 2. 黒石川窯跡出土軒丸瓦

1712年に再建された際の首里城正殿の屋根景観は、瓦生産がちょうど灰色や褐色から赤色へと移行する端境期に当たるため、断定が難しい。ただ石垣島の瓦生産の展開が沖縄島と連動したのなら、灰色瓦の生産は18世紀前半頃まで続いた可能性も残されていることになる。灰色や褐色が大半を占め、僅かに小豆色が混ざる、再建前と同様の屋根景観だった蓋然性が高いであろう。

なお首里城のすぐ北に存在した円覚寺跡の発掘調査では、龍淵殿地区にて木炭と被熱した瓦が集中して出土した石積みを確認されており、1721年に円覚寺が焼失した際の廃棄場所とされている。報告書ではここから灰褐色の平瓦と丸瓦が出土している(沖縄県立埋蔵文化財センター2002:29、92-96)。18世紀前半にはまだ灰褐色の瓦屋根景観が存在したことをうかがわせる。



【第7期】 ? ~1768年? ~1879年

正殿は18世紀以後、20世紀まで大きな火災に遭うことはなかったが、発掘調査でⅦ期基壇が検出されている。しかしⅦ期基壇は報告書ではⅥ期基壇と同じ18世紀初頭以降に位置づけられており（沖縄県立埋蔵文化財センター2016a:333）、時期差ははっきりしない。また基壇前面部分はⅥ期基壇と同じ地点にあることから、第6期と第7期の正殿の構造は大きく変わることは無かったとも考えられる。

ただ1768年の工事記録『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』や、フランス軍人ジュール・ルヴェルトガが1877年に撮影したという最古の首里城正殿の写真（バイヴェール2012）とそこから描かれた木版面に写っているこの第7期正殿は正面11間×奥行7間であり、第6期より左右に1間ずつ広いと考えられる。

この増築は、おそらく修復に伴って行われたものであろう。首里城正殿の大規模修復は概ね20~40年間隔で行われており（表1 高良1988）、耐用年数をうかがわせる。Ⅶ期基壇は、その何れかに伴って築かれたと考えられる。特に1768年の『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』（図30）には正面11間、ハの字階段の正殿が描かれており、これ以前に築かれた可能性が高い。

またルヴェルトガの写真および木版面には正面向きの大龍柱が写されており話題となったが、正面階段が上がったところの左右に設けられていた小龍柱が無いことも確認される。こうした小規模な変更はあちこちで行われていた可能性が考えられる。

表1 18~19世紀における首里城正殿の重修記録

年代	資料
1709~1712年	『球陽』『笑古漫筆』
1722年	『笑古漫筆』
1728~1729年	『球陽』『尚姓家譜(伊江家)』
1766~1768年	『琉球館文書』『球陽』『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』
1803年	『百浦添御殿御普請日記』
1811年	『百浦添御殿御普請日記』
1842~1846年	『球陽』『蘇姓家譜(奥島家)』『百浦添御殿御普請日記』(二)(三)『百浦添御普請日記』

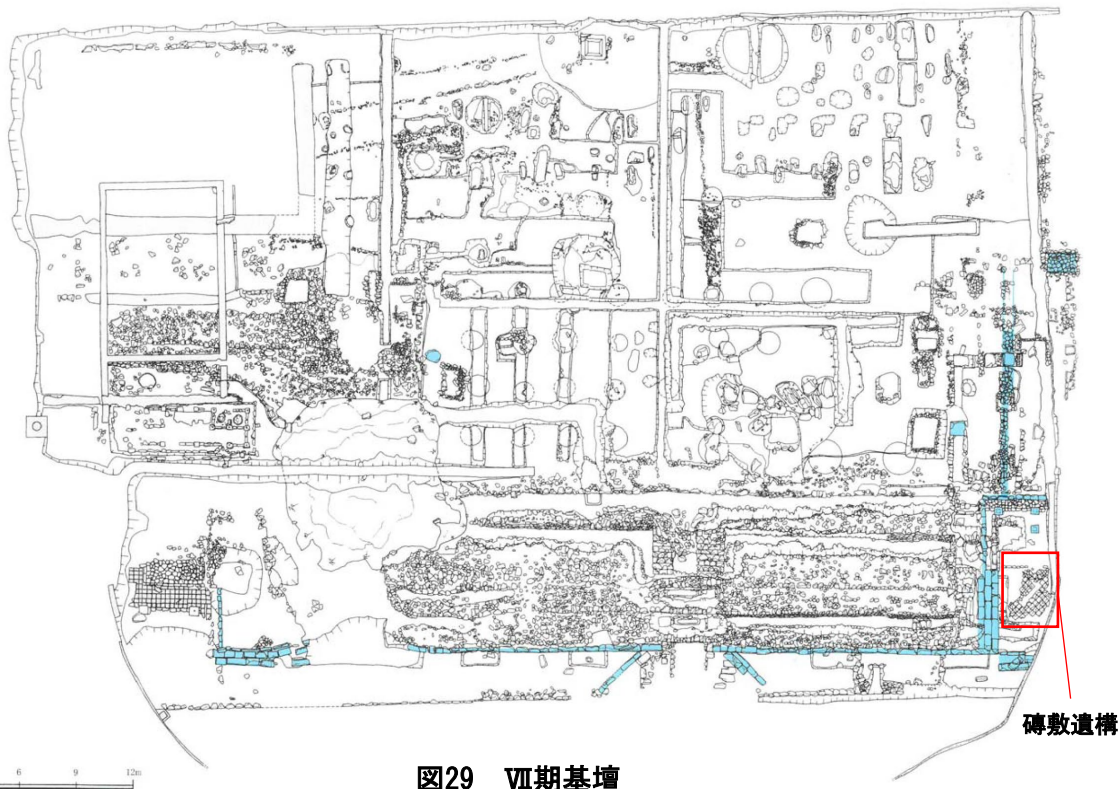


図29 Ⅶ期基壇

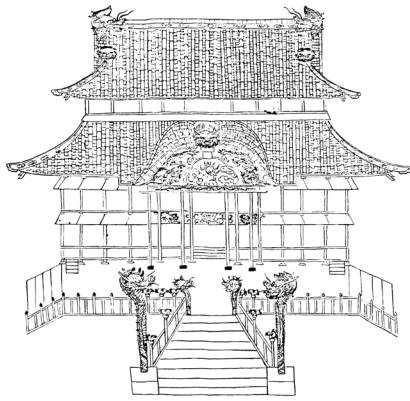


図30 『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』
(沖縄県立芸術大学所蔵)



図31 Ⅶ期基壇に伴う磚敷遺構

表に掲載した以外にも、台風等によって瓦が破損すれば小規模な修復や葺き替えが行われたと考えられよう。1760年3月と1768年6月には地震の被害を受けたことが記録されており（球陽研究会1972：339、347）、1768年には唐破風の拡幅や正面石階段のハの字形への改修が行われた可能性も指摘されている（伊従1997:23）。また唐破風の屋根は、18世紀初頭の『冊封全図』と1768年の『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』（図30）では横（南北）方向の瓦葺きで描かれているが、19世紀後半以降の古写真では縦（東西）方向になっている。ただ絵図では19世紀以降も横方向が多い。横から縦に葺き方が変化したのか、絵図史料はそれ以前の例を踏襲したのみで実態と異なるのか、検討を要するところである。

なお焼失や倒壊でもない限り、大半の瓦は使い回されたと考えられ、1712年の再建当初の屋根景観はおおむね維持されたのではないかと推察される。ただ、僅かずつ新品も使用されたであろう。この頃には赤色瓦の生産に移行していることから、新品は赤色であったはずである。間接的ながら裏付けとなるのが、当該期に位置づけられる階段下踊り場の磚敷遺構である（図31）。灰色と赤色の磚が混在して敷かれており、屋根景観も同様であったことをうかがわせる。

この時期の屋根景観は、こうした繰り返される大小の改修の度に新品の赤色瓦が追加されることで、徐々に赤色の割合が高まっていったと推察される。特に軒先の瓦は転落して破損する率が他の瓦より高いことから、軒先を中心に徐々に屋根景観が赤色化していったことであろう。『旧首里那覇鳥瞰図』はじめ、18世紀ごろの景観をうかがい知れる絵図にも、首里城の屋根が赤色系統で着色された例が見られる。

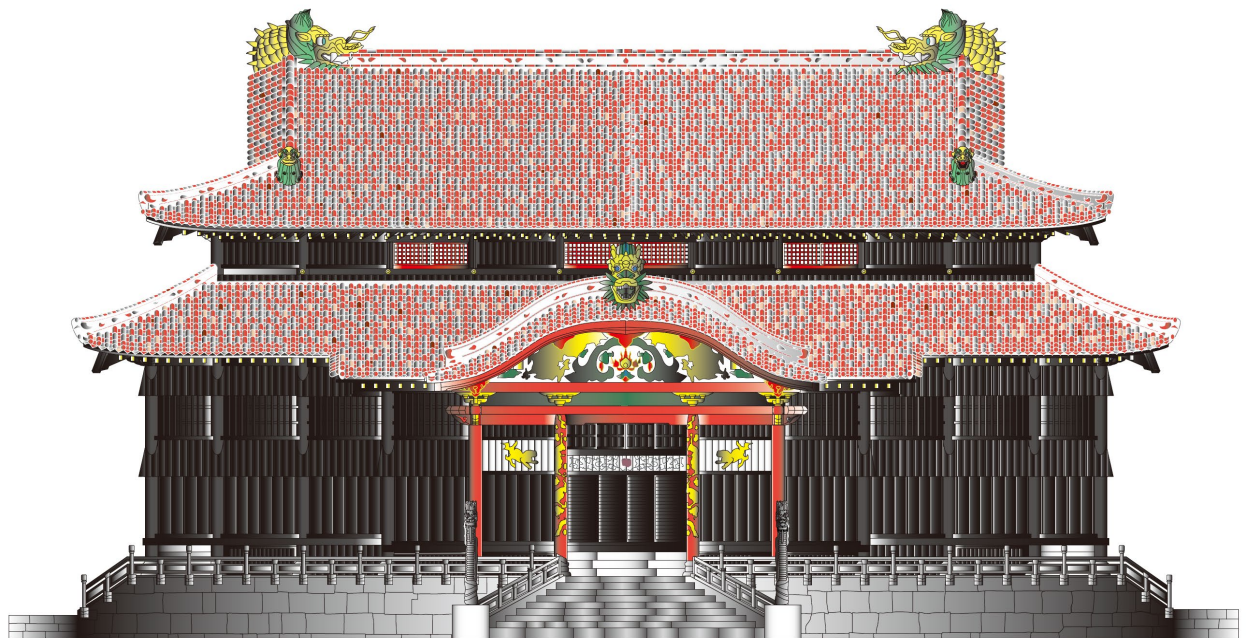


図32 第7期首里城正殿(19世紀代) 復元図

【第8期】 1879～1924年

討幕を果たし、新たな日本の担い手となった明治政府は、1872年から段階的に琉球王国の解体と領有化を進めていく。そして1879年、明治政府による一連の「琉球処分」が完了し、琉球王国は解体、国王は東京へ移り、首里城は王城としての役割を失う。

首里城には、熊本鎮台沖縄分遣隊が1896年まで駐屯し続けることになる。この時期に進められた改変の詳細は判然としないが、龍柱をはじめ城内の破壊荒廃が進んだことはよく知られる。正殿は取り壊しを免れたものの、適切な管理がされていたとは言い難い様子が、訪問したイギリス人博物学者Guillemardの記録(1886年)から読み取れる。

A more dismal sight could hardly have been imagined. We wandered through room after room, through corridors, reception halls, women's apartments, through the servant's quarters, through a perfect labyrinth of buildings, which were in a state of indescribable dilapidation. The palace could not have been inhabited for years. Every article of ornament had been removed; the paintings on the frieze—a favourite decoration with the Japanese and Liu-kiuans—had been torn down, or were invisible from dust and age. A few half-rotten mats lay here and there, but the floors were for the most part bare, and full of holes, which, combined with the rottenness of the planks, rendered our exploration a rather perilous proceeding. In all directions the woodwork had been torn away for firewood, and an occasional ray of light from above showed that the roof was in no better condition than the rest of the building. (Guillemard, F. H. H. 1886. :58)

なおこの荒廃した正殿は、分遣隊の兵卒の寝室として使用されたことが『首里城ノ図』(1893年 図36)等から確認される。古写真や『国宝建造物沖縄神社拝殿実測正面図』を見ると、屋根の軒先は波うち、一部は支えが無ければ崩れ落ちる危険な状態になっており、老朽化し続けたことがうかがえる。



図34 首里／首里城正殿と
日本分遣隊の歩哨
(那覇市歴史博物館所蔵)



図35 首里区立女子工芸学校卒業記念
(1915年3月 大嶺君子蔵、那覇市歴史博物館提供)

分遣隊が引き上げた後、城内は学校や役所として使用されたという。一部の建物は校舎等に使用され、正殿は沖縄県臨時土地整理局(1904年1月14日～1908年7月)の事務所として使用された。鎌倉芳太郎が大正11年(1922年)に撮影した正殿には窓ガラスが設けられており、一定の改修が行われたことがうかがえるが、抜本的な修復は行われず、老朽化が続いた様だ。

首里区は首里城を管轄していた陸軍省に対し働きかけを続け、1909年には建物と地所が払い下げとなったが、しかし修復や再利用の目途が立たないまま、1923年には遂に正殿の取り壊しが決議され、1924年3月25日には作業が始まったとされる。

この時期の首里城正殿の屋根景観は、基本的に近世琉球期末のままであっただろう。琉球王国による正殿の修復は1846年の記録が最後となり、基本的にはこの時の状態のまま老朽化していったと考えられる。近代期に残された記録を手掛かりに、王国末期の首里城正殿の屋根景観を推察することもまた可能であろう。

ただし時折補修工事が行われた記録もあることから、新品の瓦が補填された可能性はあるだろう。18世紀の半ば以降の瓦生産は、上述の通り恐らく赤瓦に移行したと推察され、正殿の修復の際に古材と共に赤瓦が少しずつ追加されていったと推察される。



図36 「首里城ノ図」『琉球沖縄本島取調書』
(神奈川大学日本常民文化研究所所蔵)

笹森儀介による『琉球沖縄本島取調書』所収の図面である。笹森は政府の依頼を受け、1893年に奄美・琉球諸島の調査を行った。笹森が一般向けに出版した『南島探検』によれば、6月1日に首里城を訪問し、駐屯していた熊本鎮台分遣隊の中隊長から「旧城ノ略図」を提供されたという。明言はされていないものの『琉球沖縄本島取調書』に綴られた「首里城ノ図」はこの時の図面であると考えられている。

展示資料はその彩色原図である。墨、インク、色鉛筆で彩色され、さらに鉛筆で加筆が見られる。首里城正殿は「寝室」とされ、当時の利用がうかがえる。なお正殿前の御庭地区には赤色で「一～四小隊」と「衛生部」と記され、動線と思しき経路が緑色の点線で城内各地へ伸び、またその先には歩哨を示す記号が記されており、戦時を想定した部隊運用が記されていることがうかがえる。なお本図は『南島探検』に掲載されておらず、こうした軍事色の強さが背景にあった可能性が指摘されている(渡辺2020: 19-23)。

古写真と考古資料の比較からみた 第8期正殿の屋根景観

琉球諸島の瓦屋根を撮影した近代期の古写真は、具体的な色調が不明な白黒写真か、後に着色された写真ばかりである。残念ながら写真自体から往時の屋根景観を復元するのは難しい。

しかし鮮明な古写真の中には、軒先に並ぶ軒平瓦や軒丸瓦の紋様部が確認できるものがある。琉球近世瓦の軒瓦の紋様部は特定の色調に固定されるため、白黒写真であっても、紋様を手掛かりにある程度まで色調を絞り込むことが可能である。

なお本稿で用いる紋様の分類には石井が設定した名称を用いる（石井2006）。

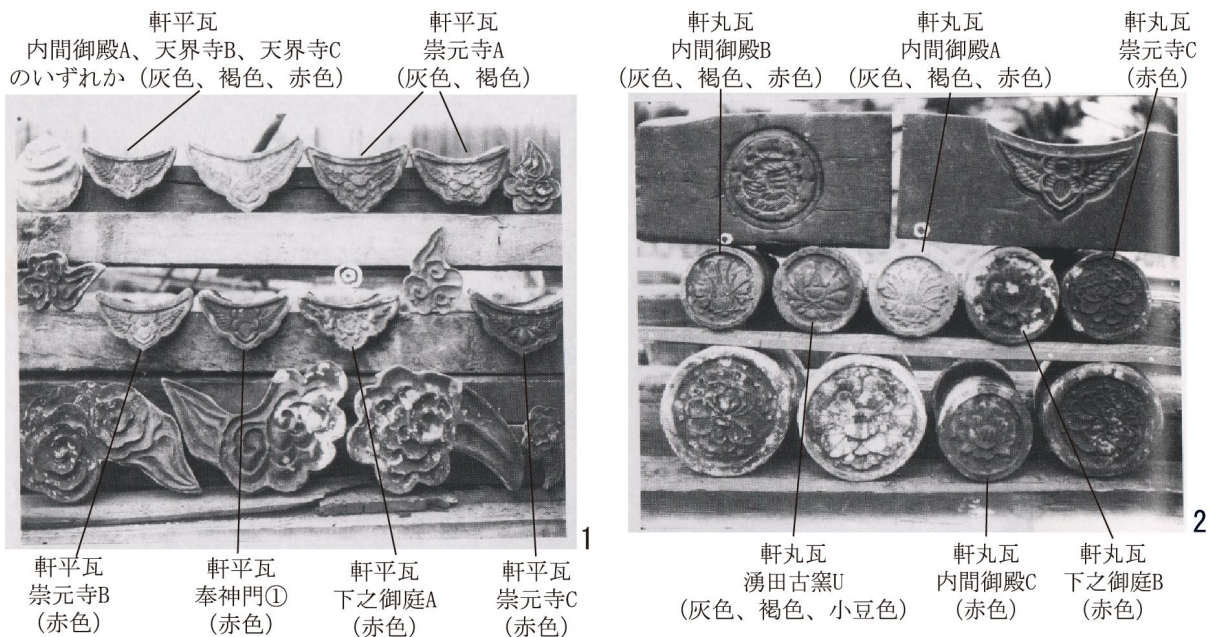


図37-1 古写真に見る首里城正殿の瓦
（野々村孝雄氏所蔵）

1. 『正殿屋根に使われていた軒平瓦』
2. 『正殿屋根に使われていた瓦』

図37は、正殿の解体が行われた際、工事監督であった柳田菊造氏が1930年から33年に撮影したガラス乾板写真『正殿屋根に使われていた軒平瓦』『正殿屋根に使われていた瓦』である。最末期の首里城正殿の屋根景観を考える上で貴重な資料といえるだろう。

この内、『正殿屋根に使われていた軒平瓦』には8点の軒平瓦と8点の飾り瓦が、『正殿屋根に使われていた瓦』には9点の軒丸瓦と、軒平瓦、軒丸瓦それぞれの紋様部を作る型である瓦当笮2点が写されている。遺跡出土資料と比較し、紋様から色調が類推できる軒平瓦、軒丸瓦を分類することが可能である。

限られた資料ではあるが、色調が確認できる資料13点の中に灰色か褐色に限定されるものが3点含まれており、赤色以外の可能性も含むものと合わせると6点に達する。これが全体の比率と対応するのであれば、1923年の解体時の首里城正殿の屋根は1/2～1/4程度が赤色以外の瓦に占められたことがうかがえる。

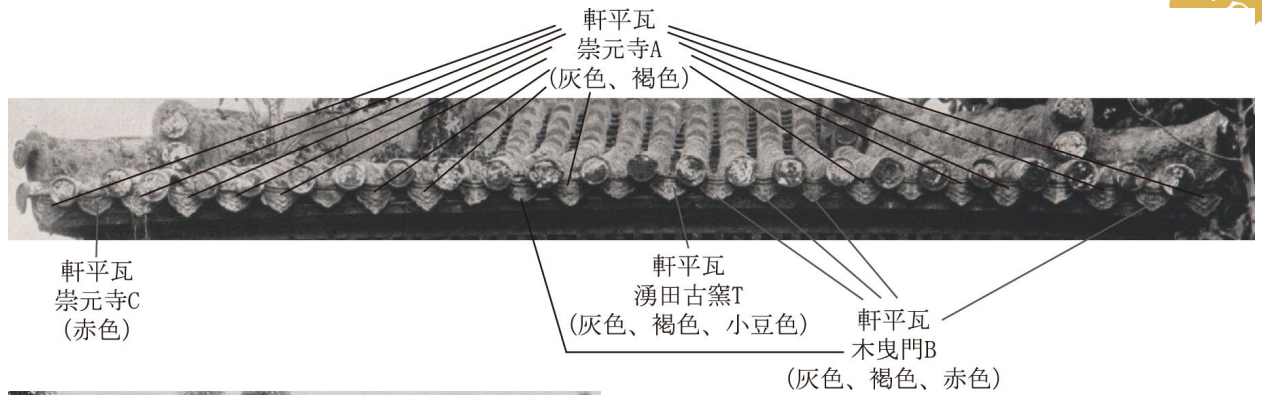


図37-2 古写真に見る琉球建築の瓦
『天久権現宮』
(沖縄県立芸術大学所蔵)

正殿以外にも、近世琉球期から存在した建物の瓦屋根を撮影した写真資料が存在する。

鎌倉芳太郎氏が大正15年（1925年）に撮影した天久権現宮の写真では、軒丸瓦は判然としないが軒先に並ぶ25枚の軒平瓦の内、灰色や褐色にしかない紋様が確認できるものが半数以上を占め、赤色と断定できるものは1枚に過ぎない。

絵図史料、着色写真からみた第8期正殿の屋根景観

瓦屋根景観の具体的な色調が示された資料として、絵図史料は注目されてきた。瓦屋根に関しては、明暗の差はあるものの全体的に赤色にまとまることがうかがえる。しかし絵図によって様々な描かれ方がされており、往時の状況を復元するには注意が必要である。なおそれぞれの絵図ごとに全体を貫く着色ルールと、そのルールからの逸脱がみられる。首里城はしばしば逸脱して着色されており、別格扱いだったこと、そしてその逸脱には幾ばくかの実態が反映されている可能性も考えられよう。

図38-1『首里城図』は、絵図中の全ての瓦屋根が赤褐色、壁は薄茶色に統一されている。しかし首里城正殿の壁と守礼門・中山門の柱だけは黒、首里城正殿の唐破風だけは赤い柱になっている。

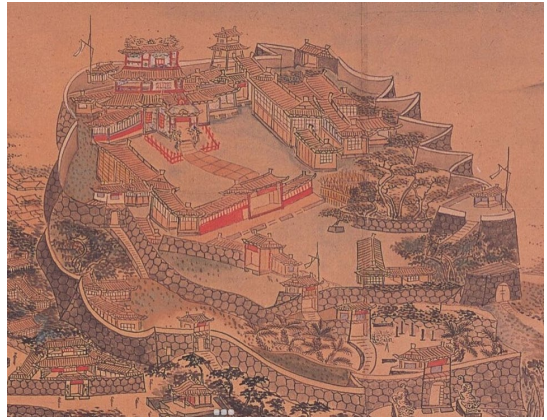
図38-2『首里那覇図』は、瓦屋根は赤褐色に統一されているが、壁は大半が薄茶色であるものの、白壁や赤い着色も見られバラエティに富む。首里城正殿や奉神門、守礼門・中山門は柱は赤、壁は赤と白になっている他、正殿の窓の格子が赤で着色されている。

図38-3『首里那覇港図屏風』は、絵図中の全ての建物の屋根が薄い黒、壁は屋根と同じ薄い黒か彩色なしとなっている。首里城は壁が黒、正殿の唐破風は赤い柱に描かれている。

図38-4『沖縄県琉球国首里旧城之図』は、絵図中の全ての建物の屋根が赤褐色に、壁が薄黄色に統一されている。正殿、奉神門、廣福門は壁は黒、袖は灰色に、正殿の唐破風は赤い柱に描かれている。また正殿最上階と奉神門の窓の格子が赤で着色されている。



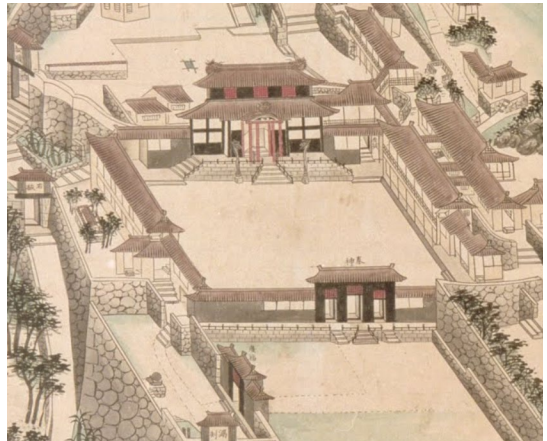
1



2



3



4

図38 絵図史料に見る19世紀後半の首里城

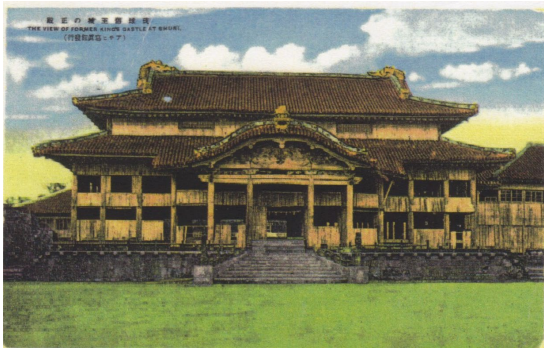
1. 友寄喜恒『首里城図』（沖縄県立図書館所蔵 1881年頃）
2. 阿嘉宗教『首里那覇図』（沖縄県立図書館所蔵 1868-1879年頃）
3. 『首里那覇港図屏風』（沖縄県立博物館・美術館所蔵）
4. 仲宗根真補『沖縄県琉球国首里旧城之図』（沖縄県立博物館・美術館所蔵 1894年）



1



2



3



4

図39 着色写真に見る首里城正殿

1. ガラス板写真『Castle of the Loo Chooan king』（琉球大学附属図書館所蔵）
2. ガラス板写真『Stone Dragon at Foot of Steps of Old Palace』（琉球大学附属図書館所蔵）
- 3, 4. 絵葉書『琉球舊王城の正殿』（沖縄県立図書館所蔵）

1、2は、1911年に那覇へ赴任し、25年に日本を離れるまで沖縄に渡り続けた宣教師アール・ブール氏によるガラス板写真である。多くの子供たちが映り込んでいることから、学校や役所として使用されていた時期の写真である。屋根の色は黒色である。なお公開されているブール氏の写真には多くの瓦屋根が写されているが、『Village Church, Yontanzan』が赤く着色されているのを除きすべて黒色にされている点は興味深い。

3、4は、沖縄県立図書館が所蔵する『伊藤勝一提供沖縄関係資料』に含まれる絵葉書である。首里城正殿を映したものが5枚3種確認される（うち2枚は重複）。この3種のうち、取り壊し以前の写真を用いた絵葉書は同じ写真素材を2通りに着色しており、一つは暗赤色、もう一つは黒色の瓦屋根となっている。

この時の首里城正殿は混色瓦屋根であり、また老朽化が進み、カビや埃によって黒ずんでいたと推察される。赤黒2通りの着色写真は、同じ対象を全く実態と異なる色調に着色した訳ではなく、当時の正殿の屋根が黒とも赤ともとれる色調であったということではないだろうか。

【第9期】1934～1945年

上述の通り、20世紀に入っても正殿は残っていたものの老朽化は進んでおり、修復や再利用の目途が立たないまま、1923年には遂に正殿の取り壊しが決議される。しかし鎌倉芳太郎、伊東忠太らによって中止され、1924年に沖縄神社拝殿、1925年には国宝に指定され、解体修理が行われている。工事は困難なものだったとされるが、1934年には落成した（甦る首里城と復元編集委員会1993:302）。

正殿正面に左右に据えられた龍柱が向かい合せに変更される等、直前の状態を完全に復元したとは言い難い点もみられるが、後の復元時と同様、古老へのヒアリングを基に、琉球王国時代の状態へ復元することが目指された様だ。また神社として灯籠や賽銭箱なども追加されたことが古写真からうかがえる。なお学校や市の施設としての利用は継続されており、『旧首里城平面図』（図40）には、新築の小学校の校舎や、市公会堂として使用される北殿（正殿の北西に位置する建物）の様子がうかがえる。

ではこの「沖縄神社拝殿」となった首里城正殿の屋根景観はどの様なものだったのだろうか。過去の首里城正殿の中で、この近代期の屋根景観の追究が最も難しい。複数の情報がある一方で、相互にかみ合わない内容になっている。

考古資料、文献資料、写真資料などから分析すると、第9期正殿の屋根景観は、第8期の正殿にやや赤色瓦が加わった屋根景観であった可能性が高い。灰色や褐色がおおむね2～3割、赤色瓦と黒塗り赤色瓦が8～7割を占める屋根景観だったと推察される。ただ黒塗り赤色瓦（図43）は着色部分が風化して徐々に赤色化したと考えられることから、月日が経つにつれ赤色の比率が増えていったのではないかと推察される。



図40 『旧首里城平面図』
（沖縄県立図書館所蔵）

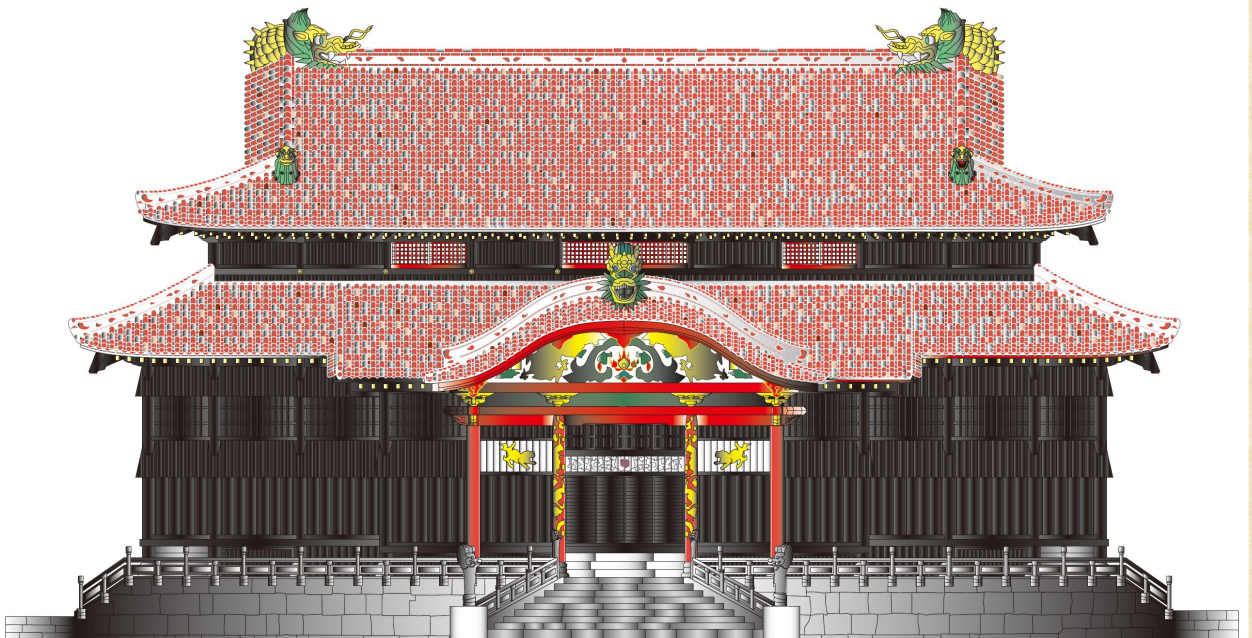


図41 第9期首里城正殿 復元図

文献資料

沖縄神社拝殿修理事務所が作成した『国宝建造物沖縄神社拝殿修理工事新設計内訳書』によれば、近世琉球期に葺かれた瓦がそのまま使用されたことがうかがえる。

「屋根瓦ノ使用ニ堪ヘ得ルモノ全部古漆喰搔キ落シ充分掃除ヲナシ不足分ハ在来ノ形ニ倣ヒ上焼補充シ」

(沖縄開発庁 沖縄総合事務局 開発建設部1987:141)

修理に当たって購入された瓦一覧も記録されており、巴瓦（註：丸瓦）450枚、唐草瓦（註：軒平瓦）370枚、雁振瓦151枚、平瓦丸瓦105坪分、鳥衾瓦8枚、飾瓦7枚、雲瓦の大15枚、中50枚、小25枚となっている（沖縄開発庁 沖縄総合事務局 開発建設部1987:154）。1992年に復元された正殿の延床面積が約1199㎡（内閣府沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所2016:4）とあることから、新規購入された平瓦、丸瓦105坪（約340㎡）は屋根全体の概ね1/3～1/4程度であり、おそらくは大目に購入したものと考えられるが、最大でそれだけ屋根景観に占める赤色の割合が高くなったことだろう。上述の通り、近世琉球期末の首里城正殿の屋根は1/2～3/4程度が赤色瓦に占められていたと考えられるため、単純計算で2/3～3/4まで屋根の赤色の比率が上がった可能性がある。

ただしこの概算は追加された瓦が赤色瓦だった場合の話であり、黒塗り赤色瓦(図43)だった場合は逆に赤色の比率は減少し、より黒ずんだ屋根景観になったと考えられる。

米軍撮影動画

2014年、戦災を受ける直前の首里城を映したカラーフィルムが発見され、ニュース報道されて話題を集めた。太平洋戦争の資料収集に取り組む市民グループ「豊の国宇佐市塾」が、米国の国立公文書館から購入したフィルムの中に写っていたもので、1945年4月下旬～5月上旬ごろ、日本軍の拠点を攻撃する米軍の爆撃機から撮影されたとみられる数秒の映像である。このフィルムでは首里城正殿の屋根瓦は黒く映っており、1992年時の復元に疑問を呈する証拠として現在もネット上で引用され続けている。

このフィルムに写されている首里城正殿、北殿、南殿は確かに黒い屋根に見える。ただ注意したいのは、首里城の周囲に広がる瓦葺き建物も、すべて黒い屋根に見える点である。また屋根の色が全て一様に黒い点も気になる点である。本資料は沖縄神社拝殿を映した貴重なカラーフィルムであることは間違い無いが、色調の判断材料としては慎重であるべきだろう。

着色絵葉書



上述した沖縄県立図書館が所蔵する『伊藤勝一提供沖縄関係資料』の中にある着色絵葉書のうち、首里城正殿を映した3種中1種は、沖縄神社拝殿となってからの写真を用いた絵葉書である。屋根は暗赤色に着色されている。

図42 着色写真に見る
首里城正殿
絵葉書『琉球舊王城の正殿』
(沖縄県立図書館所蔵)

考古資料

発掘調査で出土した資料のうち、この時期に特定できる一括資料は得られていない。ただ注目すべき資料として、黒色に塗装された赤瓦がある（沖縄県立埋蔵文化財センター2016a：168-172、175-220）。報告書ではマンガン釉とされ、平瓦、丸瓦、軒平瓦、軒丸瓦、飾り瓦といった幅広い種類が確認される。首里城跡の発掘調査では過去にも出土例がある。ただ黒色の皮膜は薄く実際には黒ずんだ赤色を呈したものもあり、また黒色の定着が悪いため剥落している資料も見られることから、恐らく葺かれているうちに風化が進み、赤くなってしまったものと推察される。塗布される範囲はまちまちだが、屋根に葺かれた際に露出する面に限定される資料がみられることから、屋根景観を暗赤色に見せるための措置と判断される。

報告書ではその使用について特に言及はないが、黒塗りの丸瓦は絶対的に少ない（沖縄県立埋蔵文化財センター2016a：171）とされている。正殿の発掘を担当し、瓦の研究者でもある上原静氏は「正殿の屋根をふくには数が少ない。戦前、首里城を沖縄神社にした時、拝殿としての正殿の奥に、神殿などの黒い瓦をふいた小さな建物を造ったのではないか」としている（沖縄タイムス+プラス2019）。

92年の復元時に行われた古老からのヒアリングによれば、戦前の正殿の瓦は補足瓦にマンガンをかけて焼成し、黒瓦らしくみせて葺いたという証言があり、さらに修理前の正殿は赤瓦と黒瓦が混ざっていたとされる。一方で、戦前の正殿の屋根はくすんだ赤瓦のイメージがあり、黒瓦ではなかったと思うという証言も得られている（沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所1989:50）。

なお復元修理に当たっては、古色を出すため新しい建築資材が黒く着色されることがあった様だ。瓦に関する内容ではないが、当時の試行錯誤が偲ばれる興味深い証言がある。

「向拝を支える四本の柱のうち向かって左から二番目の柱は新材の柱に取りかえられた。そしてはじめ他の三本の古い彩色柱と調和させようとしてピンク色に塗ったが、あまりにも鮮明すぎるということで葺たわしで半ば洗い落とし、その上から黒色をうすく塗った」（甦る首里城と復元編集委員会1993:302）

唐破風の柱が赤系統の色で塗られていたこともうかがえる。こうした複数の証言を踏まえると、カビと埃で黒ずんだ中古の瓦と合わせるため、新品の赤色瓦に黒い着色が行われた可能性はあるだろう。くすんだ赤色という証言は、汚れた古い赤瓦、あるいは着色された赤瓦のことを指すのかもしれない。なお黒塗り赤色瓦は正殿に留まらず、首里城跡の各地から出土することから、各所の補修工事に使われた可能性も考えなければならない。



図43 首里城跡正殿地区出土の黒塗り赤色軒平瓦
（沖縄県立埋蔵文化財センター所蔵）

【第10期】1992～2019年



図44 破壊された首里城
(那覇市歴史博物館所蔵)

復元修理から僅か10年余りの1945年、首里城正殿地下には日本軍沖縄守備軍の戦闘指令所である第32軍司令部壕が置かれた。そしてアメリカ軍による猛攻撃を受け、過去にないほどの破壊を被ることとなる。

その後、跡地には琉球大学が設置される。1949年6月8日に諸施設の建設が着工され、1950年4月25日に落成を迎える（琉球大学HP）。この時、正殿跡のすぐ傍に建てられた本館は、首里城正殿を模したデザインとなっている。



図45 琉球大学首里キャンパス本館
(琉球大学所蔵)

1992年、当時の研究者たちによる総合的な知見の下で復元がなされた。この第10期正殿が沖縄県の観光業の目玉として、90年代の沖縄ブームの中で象徴的に扱われ、全国、全世界に向けた沖縄のシンボルとして多大な貢献を成したことは歴史的事実である。

第10期正殿の大きな特徴は、壁と屋根の赤色であることは論を待たない。「青空に映える首里城の赤瓦は、沖縄のイメージの一つ」と表現されるほど、首里城と言えば赤色という強力なイメージを作り上げることとなった。

しかし正殿の屋根景観が赤一色になったのは、この第10期正殿が初めてである。出土遺物に灰色、褐色、黒塗り赤色の瓦は確認されていたものの、復元に反映されることはなかった。

この復元の際に生産され用いられた赤瓦については様々なメディアで取り上げられているが、今回の火災に当たり、沖縄県内の瓦職人でつくる「沖縄県琉球赤瓦漆喰施工協同組合」が県に対し、焼けた瓦を廃棄せずに保存し再利用すべきとした要請は象徴的であった。報道によれば「赤瓦を再利用できるかどうかは職人が音や形を確かめることでしかわからない」とし、また「全焼した正殿に使われている赤瓦は5年前に亡くなった職人が手がけたもので、現在では手に入らない土がブレンドされているほか、高温で焼き上げる高い技術が使われているため、再現できない」とする（NHK WEB NEWS 2019年11月5日）。

数十年前に復元された際の瓦がブランドとなっていること、現在も琉球の瓦が生き続けその過程で失われるものもあったこと、そして過去に繰り返されてきた古瓦の再利用が今日も行われようとしていることを示しているといえよう。なお2019年の火災により被災した瓦は「首里城破損瓦」と呼ばれ、「首里城への思いを多くの人が共有し、また思いを形として残していく」ことを目的に「首里城破損瓦等の利活用アイデア」が募集される等、その活用が模索されている（沖縄県HP2020）。



図46 TVドラマ『琉球の風』ロケ風景
(那覇市歴史博物館所蔵)

城からみた沖縄の近現代史

前田勇樹・古波藏契

首里城（およびその場所）が、最も激動の歴史を辿るのは近現代である。王権の象徴として鎮座した近世期と異なり、琉球王国廃滅後の首里城は兵営、学校、神社、大学など目まぐるしくその姿や役割を変えていった。そして、その変化の中にこそ、近現代の沖縄の屈折した歩みが映し出されている。ここでは、「首里城の近現代史」と共に、「首里城からみえてくる沖縄の近現代史」について概説したい。

1. 明治の首里城―「破壊」と「大衆化」の始まり

1879年3月27日、警察と軍隊を率いて首里城に乗り込んだ琉球処分官松田道之により、琉球の廃滅と沖縄県の設置が通達された。450年続いた琉球王国は、近代日本へと併合され、尚王家とその祭祀は中城御殿へ移され、首里城は熊本鎮台分遣隊の兵営として接收された。

イギリスの博物学者ギルマードは、1882年6月に軍隊に接收されて間もない首里城へ訪れ、荒廃した様子について記録している。さらに、ギルマードが訪れた2か月後には沖縄で大地震が発生しており、熊本鎮台関連の史料には、首里城の屋根が傾き、漆喰は壊落したという記録が残っている。翌年1883年には台風が直撃しており、首里城の状態はさらに悪化した（アジア歴史資料センター「沖縄首里城内兵舎修理費用之義二付伺」1883年10月29日）。同様の地震と台風による被災は1911年にも起きている（「首里城内の破損」『琉球新報』1911年6月20日）。



図47 沖縄分遣隊が駐留する首里城書院・鎖之間

このように熊本鎮台の兵営時代の首里城からみえてくるのは、「破壊」の歴史である。1895年の日清戦争に日本が勝利すると、琉球列島をめぐる日清間の軍事的緊張感も緩和され、翌年に熊本鎮台分遣隊は引き上げていった。その際に正殿前の大龍柱を切断して持ち帰ろうとする事件が発生している。結果的に埋め戻された大龍柱であったが、片方が折られて短くなった状態で埋め戻されており、昭和の復元まで左右の高さが不揃いな姿となっていた（甦る首里城と復元編集委員会1993）。

1900年8月から1904年3月まで首里城正殿は「沖縄県臨時土地整理局」の事務所として利用された。「土地整理事業」とは、王国時代の土地制度を改良し、日本への同化を進める一大事業であった（『沖縄県史』各論編5 近代）。これによって近世琉球の土地共有制は解体（民衆は土地から解放）され、土地の私有制が始まった。沖縄での「地租改正」である。

また、近現代の首里城を語る上で欠かせないトピックが「教育」である。近代に入り、政治の中心が那覇へ移った一方、首里は文教の地となり、旧国学（近世琉球の最高学府）の流れをくむ沖縄県立第一中学校や、沖縄の同化を最前線で担う教員を養成する沖縄師範学校が首里に設置された。熊本鎮台引き上げ後の首里城にも師範学校や師範附属小学校、女子工芸学校、県立中学分校（後の二中）が一時的に間借りする形で入っている。また、日清戦争後に生じた就学児童の増加に伴い首里尋常高等小学校が首里城に作られ、「御庭」は運動場として利用された（甦る首里城と復元編集委員会1993）。御庭が運動場になるという出来事は、近代に起きた「首里城の大衆化」の一側面であり、この後地域の行事の場として御庭が利用されるケースが見られる。例えば、明治末期の1909年には、天長節の催しが行われており、男女が北殿と南殿に分かれて茶会を開いた後、御庭では余興として地域対抗の相撲大会が行われ、多くの群衆が集まったという（「天長節の首里城内」『琉球新報』1909年1月5日）。

2. 大正から沖縄戦までの首里城—昭和の復元と日本への「同化」

明治の終わりから昭和戦前期にかけての首里城は、前述した「大衆化」や「同化」がさらに進展する中で、「近代」と「伝統」のせめぎ合う歴史が見られる。

大正元年にあたる1912年には、明治時代を偲ぶ「明治聖代記念事業」の一環として、首里城内に公会堂や一大明治記念館を建造する提案がなされた。これらの計画の中では、沖縄内部の旧守派（頑固党）の拠り所となっている首里城正殿を明治記念館へと改修することで、新たな時代（日本）への同化を進めようとする思惑によるものであった（「明治聖代記念事業」『琉球新報』1912年10月29日）。また、1916年には歓会門脇に「忠魂碑」が建てられた。日露戦争後、戦死者を慰霊・顕彰する目的で沖縄各地に忠魂碑が建立された。この潮流の中、首里区でも在郷軍人会を中心に忠魂碑建立の計画が持ち上がり、勸会門の側に建立された（「首里の忠魂碑」『琉球新報』1916年1月8日）。この忠魂碑は、沖縄戦で一部が破損したが、現在も同地にひっそりと建っている。



図48 首里城に残る忠魂碑

首里城は1903年に建物、1909年に土地が首里区へ払い下げられたが、当時の首里区の財政状況ではこれが限界であった。兵営時代の破壊や度重なる天災の被害を受けたことで、大正期の首里城正殿はボロボロの状態であった。1923年に首里市は正殿の解体を決議し、跡地には沖縄神社が建てられることとなった。これに対して、沖縄女子師範学校の図画教師として沖縄へ赴任していた鎌倉芳太郎は、首里城解体の報を聞き、保存に向けて動いた。伊東忠太（建築研究者）と黒板勝美（歴史研究者）の協力により、首里城の各建造物を文化財として高く評価（価値づけ）し、これによって首里城正殿は1925年に特別保護建造物（国宝）に指定された。ここから正殿の解体と修復が進み、1933年に修復が完了する（いわゆる昭和の復元）。この年には守礼門、歓会門、瑞泉門、白銀門も旧国宝に指定され、北殿は1936年から博物館となった。また、鎌倉らの尽力により首里城に関する基礎資料の収集も進められ、在りし日の正殿の姿が再現された（**与那原2016**）。

実は昭和の復元時にも龍柱の向きが問題となっている。真栄平房敬氏の聞き取りによれば、王国時代に首里城内へ出入りしていた古老たちの要望や指示により、近代を通して前向きであった龍柱を左右向い合せに設置したという。これに対して比嘉春潮は前向きを主張したが、結果的に昭和の復元から1945年の沖縄戦による破壊までの10数年間正殿前の大龍柱は向い合せであった（**甞る首里城と復元編集委員会1993**）。



一方、昭和の復元は日本への同化と不可分のものとなっていた。正殿は、その背後に設置された沖縄神社の拝殿として修復され、国宝指定されたのである。この沖縄神社には、祭神として源為朝、舜天、尚円、尚敬、尚泰が祀られ、日琉同祖論の聖地として位置付けられた。伊波普猷の『古琉球』（1912年）出版以降、柳田国男の『海南小記』をはじめ学者やジャーナリストを中心に南島への関心が高まっていた。沖縄を訪れる知識人たちは、沖縄（琉球）の言語や文化に古い日本の姿を重ね合わせながら「古日本の鏡としての琉球」の姿を見出していた。日琉同祖論に関連する「琉球の偉人たちが祀られた首里城には、戦前多くのツーリストたちが訪れたという（多田2008）。

こうして修復・復元された首里城であったが、その約10年後、戦争によって「破壊」の歴史が繰り返されることとなる。太平洋戦争末期の沖縄戦において、首里城の地下には日本軍の第32軍司令部壕が設置された。3月26日に座間味へ上陸した米軍は、4月1日に本島中部へ上陸する。ここから1ヵ月半の間、沖縄本島中部から首里の司令部にかけて日米の激しい戦闘が続く。5月22日、32軍司令部は戦局をさらなる持久戦へ持ち込むべく南部への撤退を決断する。多くの沖縄住民が避難していた本島南部への撤退は、さらなる非戦闘員の犠牲を出すこととなった。5月29日に米軍は首里城を制圧しており、首里での激戦に巻き込まれた首里の住民の42%が命を落としている（沖縄県文化財課史料編集班編2017）。また、当時首里城近辺の壕に避難していた真栄平房敬氏によると、「首里城の方角を遠望すると、「鉄の暴風」と呼ばれたあの激しい砲弾雨を浴びた城が、しだいに「満身創痍」となっていく姿が見えた。四月のある日の夕刻、爆撃によって「南殿」辺りの建物が真っ赤に炎上する光景も、実際にまのあたりにした」という（真栄平1989）。復元された首里城と共に、中城御殿に保管されていた琉球王国の文化財の多くが戦争で焼失した。

3. 戦後の首里城－琉大から沖縄ブームへ

戦後、沖縄は日本本土と切り離され米軍の統治下に置かれた。27年にわたる米軍統治時代の始まりである。戦争により荒廃した首里城跡には、1950年に琉球大学が設置された。沖縄にとっては歴史上初の大学であり、近現代を貫く文教の地としての首里の歴史がここからうかがえる。

米軍当局から琉球大学顧問として派遣されたジョン・G・チャップマンが書いたとされる開学当初の『琉大便覧』には次のような言葉が書かれている（琉球大学開学50周年記念史編集専門委員会編1981）。

本大学は、日本のものでもなく、米国のものでもない。これはその創立者たちが勉学をせんとする者の要望を満たし、かつ琉球諸島の人々の役に立つ学府に成長する様にと念じて創設されたものである（中略）私たちは首里を昔のように沖縄文化の中心地とした。そして新旧文化を渾一融合すれば、それは民族の誇りと喜びになり、この諸島すべての家庭に福祉をもたらすものとなるであろう。

ここで言う「新」とは、民主主義や自由主義といったアメリカ的な文化であり、「旧」とは日本に取り込まれる前の琉球の文化を指している。米軍は沖縄の恒久的な軍事利用を目的に日本との切り離しを図り、日本人とは異なる「琉球人」意識を涵養すべく、その文化や歴史を称揚する文教政策を展開した。そのため、戦後米軍によって作られた組織や企業には積極的に「琉球」の名称が使用されたのである（例：琉球大学、琉球政府、琉球銀行、琉球警察など）。

現在の琉球大学（西原町千原）の中には「首里の杜」（附属図書館と本部棟の間）と呼ばれる広場があり、そこには首里時代のキャンパス内に建っていた「首里城の碑（SHURI CASTLE）」が移設されている。表が英語、裏が日本語で書かれたこの碑文には、戦争の前までこの場所（琉大首里キャンパス）には琉球の王城が建っており、1879年まで琉球という一つの国家があったことを記し、由緒ある場所に大学が建っていることを記している。ちなみに、現在の首里城公園内には「琉球大学の碑」が建っているので、琉大内にある「首里城の碑」と首里城内にある「琉球大学の碑」を合わせてご覧になることをオススメしたい。

他方、米軍側が琉球民族という意識の涵養を図ったのに対し、住民側の反応は芳しくなかった。米軍統治下の現状に不満を抱く人々にとって、唯一の打開の筋道は「祖国」日本への復帰であり、そのためには「日本民族」としての意識を保つことが重視された。「異民族支配」からの脱却を、「同一民族」である日本への合流に求めた多くの人々が、復帰運動に身を投じたことはよく知られている。そうした背景もあって、米軍統治期に発表された文学作品の中では、琉球王国の時代や首里城は、民衆に対する抑圧の象徴として、ネガティブに描かれることも少なくなかった。





図49 首里城公園内の「琉球大学跡」碑



図50 琉球大学内の「首里城の碑」

そうした傾向は歴史学の分野にも見られた。60年代以後、琉球処分を中心とした近代史分野では、沖縄・日本の「民族統一」の過程を解明しようとする観点から積極的に研究が進められる一方、近世以前の琉球史研究は、長らく光の当たらない分野となっていた。

これが一転するきっかけとなったのが、1972年の日本復帰（沖縄施政権返還）と、その後の「琉球史ブーム」である。復帰後間もなく首里城復元の話が持ち上がり、翌1973年には「首里城復元期成会」が設立された（首里城研究グループ編『首里城入門』）。また、1970年代後半からは、安良城盛昭、高良倉吉らを中心に琉球史研究が隆盛する。特に高良倉吉は、1975年に開催された海洋博での沖縄館のプロデュースをはじめ、その後「琉球史ブーム」のプロモーターとして活躍した。ここで打ち出された琉球史像は、世界各地と海を通じて交易し、繁栄を極めた「海洋国家・琉球」という歴史像であった。それは薩摩による搾取の対象とされてきた面を強調してきた従来の琉球史像に対して、主体的な海洋国家としての琉球史像を前面に押し出したものだった（高良1980）。

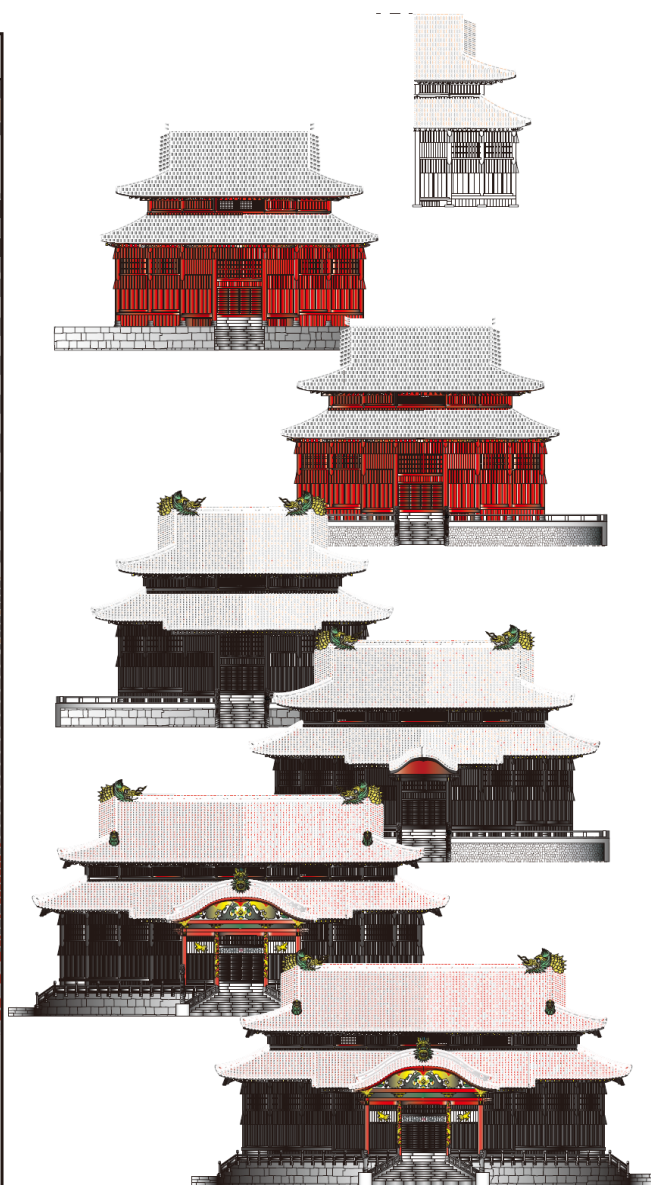
そうした琉球史像の転換は、復帰後の沖縄社会の変化に呼応したものであった。かつて同一民族であることが強調された日本と沖縄だったが、いざ復帰してみると両者の違い、つまり沖縄の「個性」が際立つようになった。上述のような琉球史像の転換は、そうした沖縄の「個性」の由来を解き明かし、さらにポジティブなかたちでの表出先を与え、さらには県民自身が琉球史を「わたしたちの歴史」として受容していく流れを生んだ。

復帰20周年記念事業として復元が進められていた首里城公園は、1992年に開園した。アカデミックな場所で積み重ねられた琉球の歴史像が、誰にでも見て触れることのできる復元文化財ないしは沖縄観光の目玉として立ち現れた。翌93年には大河ドラマ「琉球の風」のセットとして利用され、さらに2000年には「琉球王国のグスク及び関連遺産群」の世界遺産登録により世界的な価値が付与された。それは首里城が沖縄を象徴する建造物として確固たる地位を築いていく過程でもあり、県民の間で「わたしたちの首里城」という意識が形成されていく過程でもあった。

92年の開園後も首里城は調査研究と復元が継続され、2019年3月に全ての復元が完了する。しかし、それから8ヵ月後の10月30日未明、火災により正殿および周辺施設と収集された多くの文化財が灰燼に帰した。ここまで見てきた近現代の「破壊」の歴史の一つとも言えるが、沖縄県民をはじめ国内外に大きなショックと喪失感を与えた。また、次の復元（令和の復元）に向けて、新たな課題も出てきている。「わたしたちの首里城」を復元する主体は、わたしたち県民でなければならないという観点から、「県民主体の復元」がキーワードとなってきている。しかし、どのようなかたちで進めれば、「県民主体」と言えるのか。専門的学知の成果と、県民が求める首里城像とを融合するために、どのようなプロセスを踏めば良いのか。そうした議論の前提から詰めていく必要がある。復元された首里城が、再び「わたしたちの首里城」と呼んでもらえるようにするために、地に足をつけた議論の場が求められている。

首里城正殿の屋根景観年表

首里城正殿の 時期区分	首里城正殿の 屋根変遷
【第1期】 13世紀後半～1392年？～	
【第2期】 ？～1453年？1459年？	
【第3期】 ？～1456年 ～16世紀初頭	
【第4期】 16世紀初頭 ～1660年	
【第5期】 1670～1709年	
【第6期】 1712～？年	
【第7期】 ？～1768年？ ～1879年	
【第8期】 1879年～1924年	
【第9期】 1934～1945年	
【第10期】 1992～2019年	



創建から1945年までの時期、首里城正殿の屋根が全て単一色の瓦で覆われた時期は無かった。灰か黒か赤か、という単純な話ではなく、近代以前の全時期を通じて首里城正殿の屋根の色は混在しており、その程度が異なると理解すべきであろう。

そして屋根材が出土していない第2、3、4期、赤色瓦の生産消費が何時から始まるのかという問題が残る第6期、資料は多いものの互いに齟齬のある第9期は、特に今後の資料蓄積が望まれるであろう。

引用・参考文献

- 栗国恭子 1998「琉球と錫について」『首里城研究』4:37-43
- 安里進 1996「首里城正殿基壇の変遷」『首里城研究』2、首里城公園友の会
- 石井龍太 2006「琉球近世瓦当紋様集成と型式学的分類～琉球近世瓦の研究その2～」『東京大学考古学研究室研究紀要』20: 109-148
- 石井龍太 2010「瓦当範の移動にみる琉球近世瓦の生産～琉球近世瓦の研究～」『南島考古』29:77-92
- 石井龍太 2014a「渡地村跡出土瓦の分析 ～琉球近世瓦の定義に関して～」『壺屋焼物博物館紀要』15:23-43
- 石井龍太 2016「琉球近世瓦の展開と琉球近世史」『沖縄考古学会2016年度総会・研究発表会（配布資料）』3-11
- 池谷望子・内田晶子・高瀬恭子 2005『朝鮮王朝実録 琉球史料集成【原文編】』榕樹書林
- 伊從勉 1997「首里城正殿唐破風の起源とその改修について：王権儀礼の舞台装置の誕生」『首里城研究』3: 9-27
- 上原静 1994「首里城跡西のアザナ地区出土の明朝系瓦とその推移」『南島考古』14:153-186, 沖縄考古学会
- 上原静 仲宗根求 小原裕也 伊波勝美 上門大悟 2011「喜名古窯跡（瓦編）」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』35:43-105
- 大川清 1962「琉球古瓦調査抄録」『文化財要覧 一九六二年版』琉球政府文化財保護委員会編: 103-121
- 沖縄開発庁 沖縄総合事務局 開発建設部 1987『首里城関係資料集』
- 沖縄県HP 2020「首里城破損瓦等利活用アイデア決定！」
<https://www.pref.okinawa.lg.jp/site/chijiko/tokumei/shurijo/idea.html> 最終閲覧日2021年3月7日
- 沖縄県教育庁文化課 1993『湧田古窯跡（Ⅰ）－県庁舎行政棟建設に係る発掘調査－』沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育庁文化課 1994『湧田古窯跡（Ⅱ）－県庁舎議会議堂棟建設に係る発掘調査－』沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育庁文化課 1995『首里城跡－南殿・北殿跡の遺構調査報告－』沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育庁文化課 1997『湧田古窯跡（Ⅲ）－県庁舎警察棟建設に係る発掘調査－』沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育庁文化課 1999『湧田古窯跡（Ⅳ）－県民広場地下駐車場建設に係る発掘調査－』
- 沖縄県文化振興会史料編集室編 2011『沖縄県史』各論編5近代、沖縄県教育委員会
- 沖縄県文化財課史料編集班編 2017『沖縄県史』各論編6沖縄戦、沖縄県教育委員会
- 沖縄県立図書館 1976『徐葆光 中山伝信録 上』
- 沖縄県立博物館・美術館 2008『博物館企画展 図録 ずしがめの世界』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002『円覚寺跡－遺構確認調査報告書－』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書（Ⅰ）－』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013『首里城跡－淑順門西地区・奉神門埋甕地区発掘調査報告書－』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2016a『首里城跡－正殿地区発掘調査報告書－』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2016b『首里城跡－銭蔵東地区発掘調査報告書－』
- 沖縄タイムス＋プラス 2019年12月16日「首里城の瓦は“黒”だった？ 「中国人好みに捏造」は本当か 真相を探る」(<https://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/510854> 最終閲覧日2019年12月22日)
- 沖縄県文化振興会 公文書管理部 2001『世界のウチナーンチュ大会記念企画展 写真にみる近代の沖縄』
- 沖縄県立図書館HP 「古地図の概要」
(<https://www.library.pref.okinawa.jp/archive/contents/cat39/oldmaps.html>最終閲覧日2020年1月3日)
- 沖縄県立図書館 年代不明『伊藤勝一提供沖縄関係資料 沖縄絵ハガキ・写真集』
- 沖縄県立博物館・美術館 2019『グスク・ぐすく・城一動乱の時代に生み出された遺産－』展示図録
- 沖縄総合事務局国営沖縄記念公園事務所 1989『首里城正殿実施設計報告書』

- 球陽研究会 1974『球陽 原文編』角川書店
- 黒嶋敏 2020「「首里城並諸方絵図間付差図帳」について」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』90:25-32
- 国史編纂委員会 1986年『影印縮刷版(普及本)朝鮮王朝実録』探求堂
- 国史編纂委員会『明實録・清實録』(http://sillok.history.go.kr/mc/id/msilok_005_3010_0010_0010_0020_0040最終閲覧日2021年2月26日)
- 首里城研究グループ編 1989『首里城入門 ―その建築と歴史―』ひるぎ社
- 首里城復帰期成会 1993『首里城復元記念誌 甦る首里城 歴史と復元』
- 高良倉吉 1980『琉球の時代―大いなる歴史像を求めて』筑摩書房
- 高良倉吉 1988「首里城正殿に関する建築史年譜」『沖縄県立博物館紀要』14:23-30
- 多田治 2008『沖縄イメージを旅する』中央公論新社
- 塚田清策 1970『琉球国碑文記』財団法人学術書出版会
- 津波古聰 2019a「28 首里那覇全景図屏風(ガラス乾板)一枚」『琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究』思文閣出版:125-126
- 津波古聰 2019b「36 首里那覇鳥瞰図 一面」『琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究』思文閣出版:130
- 津波古聰 2019c「37 式百年前之首里那覇鳥瞰図 一面」『琉球船と首里・那覇を描いた絵画史料研究』思文閣出版:130
- 當眞嗣一、上原静 1987「首里城正殿跡の調査」『文化課紀要』第4号 沖縄県教育委員会文化課
- 内閣府沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所 2016『平成28年度事業概要 首里城公園』https://www.daas.jp/search_site/detailInfo.php?a_id=24636最終閲覧日2019年12月23日
- 那覇市 2019「玉陵」<https://www.city.naha.okinawa.jp/kankou/bunkazai/tamaudun.html>最終閲覧日2019年12月24日
- 西村貞雄 1993「首里城正殿大棟龍頭棟飾りに関するの考察」『琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部』42:107-142
- パトリック・バイヴェール 2012「沖縄に滞在したフランス人たち ―フォルカード(1844-1846年)からアグノエル(1930年)まで」日仏会館、2012年11月2日、『HAL』<https://halshs.archives-ouvertes.fr/halshs-01960831/file/Presences%20fran%C3%A7aises%20C3%A0%20Okinawa%20Diaporama.pdf> 最終閲覧日2021年3月7日
- 原田禹雄 1995『訳注『陳侃 使琉球録』』榕樹書林
- 原田禹雄 1997『訳注『汪楫 冊封琉球使録三篇』』榕樹書林
- 文化財建造物保存技術協会 1977『重要文化財 玉陵復元修理工事報告書』
- 堀川彰子 2008「一九世紀以前的那覇を描いた俯瞰的絵図の基礎研究―年代・構図・系譜」史学研究会『史林』91(3):575-596
- 真栄平房敬 1989『首里城物語』ひるぎ社
- 真栄平房昭 2019『旅する琉球・沖縄史』ボーダーインク
- 『松山御殿物語』刊行会編 2002『松山御殿物語』ボーダーインク
- 茂木仁史 2020a「⑧中秋宴図」『冊封琉球全図―一七一九年の御取り持ち―』雄山閣:22-23
- 茂木仁史 2020b「一七一九年の御庭舞台」『冊封琉球全図―一七一九年の御取り持ち―』雄山閣:58-66
- 山里勝己 2010『琉大物語』琉球新報社
- 横山重編 1940『琉球史料叢書』4、鳳文書館
- 甦る首里城と復元編集委員会 1993『甦る首里城』
- 与那原恵 2000『琉球大学50年史写真集』琉球大学
- 与那原恵 2016『首里城への坂道』中公文庫

琉球大学HP 「沿革」 <https://www.u-ryukyu.ac.jp/aboutus/history/> 最終閲覧日2021年3月7日

琉球大学開学50周年記念史編集専門委員会編 1981『琉球大学三十年』琉球大学

琉球大学附属図書館HP 「伊波普猷文庫 中山伝信録 巻2」『琉球・沖縄関係貴重資料デジタルアーカイブ』
<http://manwe.lib.u-ryukyu.ac.jp/d-archive/s/viewer?&cd=00030182> 最終閲覧日2020年1月5日

琉球大学附属図書館HP 「Castle of the Loo Chooan king」<http://manwe.lib.u-ryukyu.ac.jp/library/academic/bull/index.html> 最終閲覧日2019年12月22日

渡辺美季 2020「『琉球沖縄本島取調書』所収「首里城ノ図」について」『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』90、18-24

NHK WEB NEWS 2019年11月5日「首里城火災 焼けてしまった瓦も廃棄せず保存を 職人団体が要請」
https://www3.nhk.or.jp/news/html/20191105/k10012164591000.html?utm_int=detail_contents_news-related_001 最終閲覧日2019年12月2日

NHK NEWS WEB 2019年11月30日「「1日も早く復元を」首里城火災から1か月 観光ガイドの思い」
https://www3.nhk.or.jp/news/html/20191130/k10012197201000.html?utm_int=detail_contents_news-related_001 最終閲覧日2019年12月2日

Guillemard, F. H. H. (Francis Henry Hill): The cruise of the Marchesa to Kamschatka & New Guinea : with notices of Formosa, Liu-Kiu, and various islands of the Malay archipelago. London (1886). University of California Libraries(<https://www.biodiversitylibrary.org/item/64169#page/93/mode/1up>)最終閲覧日2021年3月6日

(史料)

「天長節の首里城内」『琉球新報』1909年1月5日

「首里城内の破損」『琉球新報』1911年6月20日

「首里の忠魂碑」『琉球新報』1916年1月8日

「沖縄首里城内兵舎修理費用之義ニ付伺」1883年10月29日(アジア歴史資料センター)

図の出典

巻頭図「首里城正殿の位置」. 沖縄県立埋蔵文化財センター2016a : 6, 7(一部改変) 図2. 沖縄県立埋蔵文化財センター2010:8 図3-1. 沖縄県立埋蔵文化財センター2010:76 2. 沖縄県立埋蔵文化財センター2010:76 : 77を改変 図4. 沖縄埋蔵文化財センター2016a : 25 図5. 沖縄埋蔵文化財センター2016a : 26 図7-3, 4, 5. 文化財建造物保存技術協会1977 : 写真56, 189, 190 図8. 沖縄埋蔵文化財センター2016a : 27 図10. 沖縄埋蔵文化財センター2016a : 28 図11. 東京大学史料編纂所所蔵資料 図14. 沖縄県立埋蔵文化財センター所蔵資料(筆者(石井)撮影) 図15. 読谷村立歴史民俗資料館所蔵資料(筆者撮影) 図16. 沖縄県立埋蔵文化財センター所蔵資料(筆者(石井)撮影) 図17. 沖縄県立埋蔵文化財センター2016b : 312 図18. 沖縄県立埋蔵文化財センター2013 : 314 図19. 沖縄埋蔵文化財センター2016a : 29 図20-1. 沖縄県立図書館1976 : 133 2. 沖縄県立図書館1976 : 158 図21. 沖縄県立図書館所蔵資料 CC BY 4.0 (一部改変) (https://www.library.pref.okinawa.jp/item/index-1104050072_1001999380.html) 図24. 個人所蔵資料(筆者(石井)撮影) 図25. 沖縄県立博物館・美術館所蔵資料 https://www.library.pref.okinawa.jp/item/index-1101396315_1007901869.html 図26. 琉球大学風樹館所蔵資料(筆者(石井)撮影) 図28-1. 石垣市立八重山博物館所蔵資料(筆者(石井)撮影) 2. 石垣市教育委員会所蔵資料(筆者(石井)撮影) 図29. 沖縄埋蔵文化財センター2016a : 30 図30. 沖縄県立芸術大学所蔵資料 図31-1. 沖縄県教育委員会1984 : 巻頭写真 2. 沖縄県立埋蔵文化財センター2016a:355 図33. 城西大学水田美術館所蔵資料 図34. 那覇市歴史博物館所蔵資料 図35. 大嶺君子蔵、那覇市歴史博物館提供 図36. 神奈川大学日本常民文化研究所所蔵資料 図37-1-1, 2. 沖縄県文化振興会 公文書管理部2001 : 展示番号117, 118 (野々村孝雄氏所蔵資料) 図37-2. 鎌倉1982:164(沖縄県立芸術大学所蔵資料) 図38-1. 沖縄県立図書館所蔵資料 CC BY 4.0 (一部改変) (https://www.library.pref.okinawa.jp/item/index-1104050080_1001999471.html) 2. 沖縄県立図書館所蔵 CC BY 4.0 (一部改変) https://www.library.pref.okinawa.jp/item/index-1104050077_1001999448.html) 3. 沖縄県立博物館・美術館所蔵資料資料 (一部改変) 4. 沖縄県立博物館・美術館所蔵資料 (一部改変) 図39-1, 2. 琉球大学附属図書館所蔵資料 3, 4. 沖縄県立図書館所蔵資料 図40. 沖縄県立図書館所蔵資料 CC BY 4.0

(https://www.library.pref.okinawa.jp/item/index-1104022048_1001904968.html) 図42. 沖縄県立図書館所蔵資料 図43. 沖縄県立埋蔵文化財センター所蔵資料(筆者(石井)撮影) 図44. 那覇市歴史博物館所蔵資料 図45. 琉球大学所蔵資料 図46. 那覇市歴史博物館所蔵資料 図47. 『[明治期の琉球の写真 7葉]』原忠順文庫HA161 (琉球大学附属図書館所蔵資料), https://shimuchi.lib.u-ryukyu.ac.jp/collection/hara_tadayuki/ha16101(最終閲覧日2021年4月21日)

図2は筆者(山田)撮影。図48, 49, 50は筆者(前田)撮影。他の図は筆者(石井)が撮影、作成した。

【白首里那覇島南図】部分、石版画、近代頃、37.9×109.2cm、当館蔵

第1期 13世紀後半～1392年?～

第2期 1453年? 1459年?～16世紀初頃

第6期 18世紀前半ごろ 1712～?年

第7期 ?～1879年

2021.
7.26[月] ▶ 9.3[金]

開館時間＝午前9時30分～午後4時30分
休館日＝土曜日、日曜日、夏期休業(8月6日～22日)
※ただし、7月31日(土)、8月28日(土)は関連企画開催のため開館

観覧料＝無料
会場＝ギャラリー2
企画＝石井龍太(城西大学経営学部准教授)
主催＝城西大学水田美術館
共催＝沖縄県立博物館・美術館
協力＝沖縄タイムス

Open: 9:30 ~ 16:30
Closed: Saturdays and Sundays, 8/6-22
※31st July and 28th August open
Admission fee: free
Place: Gallery 2

城西大学水田美術館
MIZUTA MUSEUM OF ART, JOSAI UNIVERSITY

城西大学水田美術館

『むんだすいぬやーぬ 首里城正殿の屋根』 展示図録

2021年7月25日 発行

著者 石井龍太 山本正昭 前田勇樹 古波藏契

編集 石井龍太

〒350-0295 埼玉県坂戸市けやき台1-1

TEL.049-286-2233 (代表)



城西大学水田美術館
MIZUTA MUSEUM OF ART, JOS UNIVERSITY